伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

面縄第1．第2貝塚

昭和57年度発掘調査概報

1983．3

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

面縄貝塚周辺（航空写真）

貝　輪

貝　製　品

序　　文

面縄貝塚はこれまでの調査によって，南西諸島の先史研究の上で，指標とされる「面縄式土器」を検出した貴重な埋蔵文化財包蔵地であります。しかし，その範囲等が明らかにされていなかったので，昭和57年度から埋蔵文化財確認緊急調査事業として，国・県の助成を得て，第１・２貝塚を調査しここに概要としてまとめました。この調査概要が学術研究の資料として活用されることを念願いたします。

また，調査にあたっては，文化庁，県文化課，土地所有者，地元作業員はじめ多くの方々の御協力をいただきました。記して謝意とします。

昭和58年３月

伊仙町教育委員会

教育長　樺　山　吉　郎

例　　言

1．本概報は，伊仙町教育委員会が文化庁及び鹿児島県の補助を得て，昭和57年度に実施した面縄第1・第2貝塚の重要遺跡確認緊急調査概報である。

2．調査の組織は，調査の経過の中で記した。

3．本書で用いたレベル高は第2貝塚の地表面であり任意である。

4．本書の遺物番号は，全て通し番号とし，遺物番号と本文中の番号は同一である。

5．本書の執筆及び編集は，牛ノ浜，堂込が行った。

目　　次

序 …… 1
例言 …… 2
第1章　調査の経過
第1節　調査に至るまでの経過 …… 7
第2節　調査の組織 …… 7
第3節　調査の経過（日誌抄） …… 8
第4節　調査の概要 …… 10
第2章　位置と環境 …… 13
面縄遺跡関連文献 …… 14
第3章　第1貝塚 …… 17
第1節　地層 …… 17
第2節　遺構 …… 22
第3節　遺物 …… 22
1　土器 …… 22
2　貝製品 …… 30
3　石器 …… 33
4　古銭 …… 34
第4章　第2貝塚 …… 34
第1節　層位 …… 34
第2節　遺構 …… 35
第3節　遺物 …… 35
1　土器 …… 36
第5章　まとめ …… 39
第6章　自然貝 …… 植之原道義 …… 41
第7章　獣　骨 …… 西中川　駿 …… 43
第8章　人　骨 …… 松下　孝幸 …… 51

挿　図　目　次

第1図　面縄貝塚と周辺遺跡 …… 12
第2図　面縄貝塚地形図 …… 15
第3図　第1貝塚トレンチ配置図 …… 16

第４図　Ａ・Ｂトレンチ層位 …… 18
第５図　Ｃ・Ｄトレンチ層位 …… 19
第６図　第１洞穴遺構と断面図 …… 21
第７図　第１洞穴出土土器 …… 23
第８図　Ａトレンチ出土土器 …… 24
第９図　Ａ－０区，Ｃ，Ｄトレンチ出土土器 …… 25
第10図　Ｃ－５区出土土器 …… 25
第11図　土製品 …… 26
第12図　貝輪（オオツタノハ） …… 29
第13図　貝輪，貝製品 …… 30
第14図　貝製品 …… 31
第15図　抉入石斧 …… 33
第16図　古銭拓影 …… 33
第17図　第２貝塚地層 …… 34
第18図　Ａ－２区住居址 …… 35
第19図　第２貝塚出土土器（１） …… 36
第20図　第２貝塚出土土器（２） …… 37

表　目　次

第１表　面縄貝塚と周辺遺跡 …… 14
第２表　土器分類表 …… 26
第３表　土器分類表 …… 37

図　版　目　次

図版１　１．第１貝塚より東を望む。２．Ｂ区調査風景 …… 65
図版２　１．Ａトレンチ西を望む。（発掘前）　２．発掘風景 …… 66
図版３　１．Ａ－０区，鉄製品出土状態　２．Ａ－０区　古銭（開元通宝）出土状態 …… 67
図版４　１．第１洞穴発掘風景　２．第１洞穴測量中 …… 68
図版５　１．第１洞穴兼久式土器出土状態　２．第１洞穴石斧出土状態 …… 69
図版６　１．箱式石棺墓　２．供献土器 …… 70
図版７　１．貝輪出土状態 …… 71

図版８　１．貝輪（64，65）出土状態 …… 72
図版９　１．供献工器 …… 73
図版10　１．Ａ－０区，出土土器（兼久式，面縄前庭式）　２．Ａ－１区，出土土器（兼久式） …… 74
図版11　１．Ａ－３区，出土土器（兼久式）　２．Ａ－５区，出土土器（兼久式） …… 75
図版12　１．貝輪　２．螺蓋製貝斧 …… 76
図版13　１．貝容器　２．貝匙 …… 77
図版14　１．貝製品，鉄製品，パイプウニ，有孔貝　２．古銭「開元通宝」 …… 78
図版15　１．Ａ－４区断面　２．住居址 …… 79
図版16　１．住居址　２．第２貝塚出土土器（嘉徳Ⅱ式） …… 80

第1章　調 査 の 経 過

第1節　調査に至るまでの経過

面縄貝塚は，昭和3年発見され，その後，昭和5年から昭和31年まで数回に及ぶ発掘調査が行われ，土器の編年等南島の文化を解明する上で貴重であると評価されているが，奄美大島のサウナ遺跡，宇宿貝塚等の本格的発掘調査によって新しい事実が判明しつつあり，南島における重要遺跡の見直しのなかで，面縄貝塚は現在では，滅失状態にあるといわれていた。

このような経過の中で，面綱貝塚の取り扱いについて，遺跡の概要を把握するために確認調査を実施したらとの意向がでてきた。

伊仙町は，県教育委員会の指導もあって，貝塚の稀少さもふまえ確認調査として実施することを計画し，昭和57年度から，国，県の補助事業として，伊仙町教育委員会が実施した。

調査期間は，昭和57年10月4日より11月9日まで行い，その後の遺物の整理作業と報告書の作成は，県文化課に依頼した。

第2節　調査の組織

調査主体者	伊仙町教育委員会	
調査責任者	教育長	樺山　吉郎
	社会教育課長	勇　　宗雄
	社会教育課主事	稲村　忠彦
	〃	中山　忠良
	〃	中村　勝憲
調査指導	鹿児島県考古学会会長	河口　貞徳
調 査 員	鹿児島県文化課主事	半ノ浜　修
		堂込　秀人
	伊仙町歴史民俗資料館	四本　延宏

発掘作業員

伊藤光房　中島源吉　伊藤武文　常善孝　四本政栄　有馬徳寿　徳雄一
伊藤米信　吉見テツ　義山秀子　中村富子　上木イワ　伊集院君江
西シズ子　西山セツ子　稲田美枝子　泉光子　泉トシ子　有馬喜久美
四本和美　勝原アキ子　永岡豊子　福井静江　川畑ケイ子　富由美子
泉まどか　高野のり子　浜田良子

整理作業員

河野陽子　橋口紀美子　野口久子　嶺田節子　佐々木優子

なお調査企画において，鹿児島県教育委員会文化課長　猿渡侯昭，課長補佐　本田武郎，主幹　吉井浩一，主任文化財研究員　諏訪昭千代等の他管理係の指導・助言を得た。

また，確認調査の際，脂後考古学会会長　三島格氏，前九州歴史資料館考古課長　渡辺正気氏，九州大学助教授　西谷正氏　鹿児島大学助教授　上村俊雄氏には来島いただき，指導・助言を得た。梅光女学院大学　国分直一教授には収蔵庫で遺物の指導・助言を得た。

地元，徳之島高校の成尾英仁氏，天城町役場の吉岡武美氏，鹿児島県文化財保護指導委員義憲和氏には，連日調査を手伝ってもらい，また指導・助言を得た。

地形測量は，中村勝憲・四本延宏が行った。

第３節　調査の経過（日誌抄）

10月４日(月)　９：30　亀徳港着　教育委員会へ。現地にて調査個所検討。用具点検。

10月５日(火)　発掘調査開始（第１貝塚)。遺跡周辺伐採，草払い。道具運搬。午後トレンチ設定（Ａトレンチ)。Ａ－１・３・５区調査。

10月６日(水)　雨の為作業中止。町立歴史民俗資料館にて遺物の確認。

10月７日(木)　Ａトレンチ調査。貝層検出（Ａ－１区)。Ｂトレンチ設定後調査。

10月８日(金)　Ａ・Ｂトレンチ調査。Ｃ・Ｄトレンチ設定後調査。

10月９日(土)　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。Ｂトレンチ終了。断面実測。Ｃ・Ｄトレンチ風葬骨検出，作業進まず。

10月10日(日)　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。

10月11日(月)　Ａ・Ｄトレンチ調査。Ｄ－１区Ⅱ層サラサバテイの貝輪検出。Ｄ－６区設定後掘り下げ。

10月12日(火)　Ａ・Ｄトレンチ調査。馬根小（５・６年)，面縄小（６年）見学。

10月13日(水)　第１貝塚入口付近，Ｅトレンチ設定後調査。Ａ・Ｄトレンチ調査。文化庁岡本東三調査官，町長，泉県議員，青崎和憲主事来跡（14日まで)。

10月14日(木)　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。午後雨の為作業中止。資料館にて図面整理。

10月15日(金)　雨の為作業中止。資料館にて遺物整理。午後，三島格，渡辺正気，西谷正，上村俊雄氏来訪。資料館と遺跡にて指導・助言をうける。

10月16日～10月18日　休み

10月19日(火)　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。平板実測。

10月20日(水)　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。面縄小（３～５年）見学。

10月21日(木)　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。Ａ－３区拡張。

10月22日(金)　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。第１洞穴トレンチ設定後調査。平板実測。

10月23日(土)　Ａ・Ｃ・Ｄ，第１洞穴調査。洞穴前庭部貝層検出。

10月24日(日)　第１洞穴，Ｃ－５区，Ｄ－６区調査。Ｃ－５区Ⅲ層山ノ口式土器出土。堂込主事本日まで。

10月25日(月)　第１洞穴，Ｃ－５区，Ｄ－６区調査。第１洞穴２区東側隅人骨出土。Ｃ－５区砂層より人骨，市来式土器，貝輪（オオツタノハ）出土。本日より河口先生調査に参加。義名山神社神主による御祓い。

10月26日(火)　第１洞穴拡張（人骨出土地を中心として）　Ｃ－５区貝輪４点，Ｄ－６区調査。昭和初期調査の隣接地に２ｍ×２ｍのトレンチ設定（Ａ－０区）。第２貝塚発掘調査のトレンチ設定，伐採。

10月27日(水)　第１洞穴の珊瑚礫に囲まれて人骨あり。Ｃ－５区珊瑚礫の間に貝輪出土。Ａ－０区貝層より土器，貝製品出土。第２貝塚Ａ－２，Ａ－４区より嘉徳Ⅱ式土器出土。

10月28日(木)　雨の為作業中止。資料館にて土器の分類・復元。

10月29日(金)　Ｃ－５区貝輪とりあげ。Ａ－０区貝層調査。第１洞穴人骨脚部先端まで検出（保存状態極めて良好なり）。第２貝塚平板実測。河口先生「面縄貝塚について」講演（東部公民館）

10月30日(土)　第１洞穴人骨検出作業。Ａ－０区，Ｃ－５区，Ｄ－６区調査。第２貝塚Ａトレンチ調査。平板実測。河口先生今日まで。

10月31日(日)　Ａ－０区２貝層中より鉄製品，丸底出土。Ｃ－５区Ｕ層貝輪出土。Ｄ－６区調査。第２貝塚，嘉徳Ⅱ式土器出土。

11月１日(月)　第１貝塚人骨検出。Ｃ－５区貝輪出土。Ｄ－６区Ⅲ層調査。Ａ－０区２貝層下部より「開元通宝」出土。第２貝塚嘉徳Ⅱ・Ⅰ式土器が間層を狭んで出土する。

11月２日(火)　Ｃ・Ｄ・第２貝塚調査。平板実測。第１洞穴内の人骨検出の為，長崎大学医学部，松下孝幸講師，石田肇助手来跡。検出作業。

11月３日(水)　第１洞穴人骨取りあげ。Ｃ－５区平板実測。Ｄ－６区Ⅲ層調査，第２貝塚Ａ２区Ｕ層嘉徳Ⅰ式土器出土層より住居址検出。

11月４日(木)　Ｃ－５区調査。平板実測。断面実測。Ｄ－１区断面実測。第２貝塚トレンチ調査。

11月５日(金)　Ａトレンチ断面図。埋戻し用砂運搬。埋戻し。第２貝塚住居址清掃。

11月６日(土)　Ａ－０区調査。開元通宝出土。第２貝塚断面実測。埋戻し。

11月７日(日)　第１洞穴の石棺実測。断面実測。第２貝塚断面実測。埋戻し。

11月８日(月)　第１貝塚・第２貝塚とも断面実測後埋戻し。義名山神主による御祓い。発掘作業終了。

11月９日(火)　地形測量。遺物の搬出。発掘用具整理。
深い眠りから覚めた遺物と共に鹿児島へ。

11月10日より，収蔵庫にて整理作業。

第4節　調 査 の 概 要

面縄貝塚は，徳之島の南端に位置し，面縄川の川口付近に第1～第4の貝塚が報告されている。遺跡は，鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在する貝塚である。

昭和3年面縄小学校の訓導大村行長氏によって発見され，昭和5年，広瀬祐良氏発掘。その資料を山崎五十磨氏が報告①。小原一夫氏は第1貝塚を調査し，その時面縄小学校裏に所在する貝塚を発見。山崎氏報告を第1貝塚，小学校裏手の貝塚を第2貝塚と命名している②③。昭和10年，三宅宗悦氏が第1貝塚，第2貝塚の調査を行っている④。第1貝塚は，広瀬・小原両氏がほとんど全部を発掘。昭和10年1月28日三宅氏がその一部を試掘し現在ではすっかり壊滅してしまったとなっていた。

また第2貝塚は，昭和28年8月，河口貞徳氏によって調査され，河口氏は翌年の昭和29年5月17日～6月1日まで，鹿児島大学南方産業化学研究所主催の奄美群島全域の調査に参加し先史遺跡を担当する。その際，面縄小学校校庭遺跡と現在第3貝塚と銘名されている兼久貝塚を発見している⑤。また昭和29年8月，三友国五郎氏，国分直一氏，重久十郎氏が第2貝塚を調査し，その際第2貝塚北側150mのサンゴ礁の崖地で第4貝塚を発見している⑥。昭和31年には，九学会連合の奄美調査の考古学班，国分氏・河口氏・野口義磨氏・原口正三氏は，8月8日から8月13日まで第2貝塚を8月13日から8月24日まで第4貝塚の調査を実施し，遺物を縄文時代と設定している⑦。

第1貝塚は，面縄小学校西方200m付近の南東に開口する狭小な谷状地形にある。当地は，雑草・樹木が密林化し，ハブ等からの保護を考え，谷状地形全体の伐採，草刈りにはいる。その時，昭和の初め調査された箇所を発見し，同じ珊瑚礁のテラス状になったところにAトレンチを設定し，2m間隔で区割りし，東から1・2・3・4・5区と名称し，1・3・5区を調査した。また，Aトレンチより約5m高い隆起珊瑚礁の緑辺部に，2m×2mのトレンチを設定し調査を行ったが置物なし（Bトレンチ）。また珊瑚礁崖の登り口付近の岩陰に2m×2mのトレンチを設定し（Cトレンチ），また第1貝塚入口付近の岩陰にも2m×2mのトレンチを設定した（Dトレンチ）。Aトレンチの下位のテラスに洞穴があり，調査の対象となし，第1洞穴と名称し，洞穴の北半分の入口付近を中心に調査を行った。また昭和初期に発掘されて隣接地の調査もあわせて行った。全体に大きな区画を設ければよかったのであるが標高差の違い，洞穴等，多種多様な遺構が相定されたため，任意にトレンチを設定し，設定順にA・B・C・Dトレンチと名称した。

第2貝塚は，面縄小学校東隣の西兼久から面縄川に流入する小川の南岸から福井氏宅の西側にかけ，通称クランクシと称する一帯の砂丘にある。調査区域は，昭和31年，九学会連合会奄美大島共同調査委員会考古班が調査を行った。南側の森山氏畑地で，12m×2mの南北に長いトレンチを設定し，北から1・2・……6区と名称し，2・4・6区の調査を行った。

調査の結果，第1貝塚では，縄文時代の遺物，弥生時代の貝塚，遺構（墓），遺物が確認された。縄文時代の遺物としては，爪形文土器，市来式土器，貝輪等が出土し，弥生時代の遺構

としては，洞穴内より箱式石棺に埋葬された人骨，遺物としては，兼久式土器，螺蓋製貝斧，貝匙，貝製品等が出土している。

第2貝塚では，縄文時代の遺構と遺物が確認され，嘉徳Ⅰ式土器と嘉徳Ⅱ式土器が間層をはさんで出土し，嘉徳Ⅰ式土器の包含層中より礫で覆った住居址が検出された。

1 山崎五十磨「鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就いて」考古学雑誌第20巻10号　1930
2 小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」史前学雑誌第4巻3・4号　1932
3 大山柏・小原一夫「奄美群島徳之島貝塚出土遺物」史前学雑誌第5巻第5号　1933
4 三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学第11巻第5号　1940
5 河口貞徳「南島先史時代」南方産業科学研究所報告第1巻第2号　1956
6 三友国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告　面縄第2貝塚と付近の貝塚」古代学第8巻2号　1959
7 九学会連合「奄美大島の先史時代」奄美その自然と文化　1959

第１図　面縄貝塚と周辺遺跡

第2章　位置と環境

面縄貝塚群は，鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在し，面縄川が兼久浦の浅い小湾に注ぐ，袋状地形の隆起珊瑚礁の崖下に形成された貝塚である。現在第1～第4貝塚まで報告がなされている。その他，伊仙町東公民館横の道路断面に貝層が，面縄東浜で県道横の窪田氏宅には，貝と土器，螺蓋製貝斧等の出土①がみられる。

遺跡の所在する伊仙町は，徳之島の南に位置し，徳之島町と天城町と境を接している。

徳之島の地形は，高さ200m付近を境として，山地と隆起珊瑚礁に大別される。この山地を取巻くように,海岸に向ってゆるやかに傾斜した段丘が広がり島の東南から南部西南にかけて，隆起珊瑚礁が発達して，広大な海岸段丘を形成している。隆起珊瑚礁より生成が古いので琉球石灰岩とよばれ厚いところでは100mを越えている。海岸線は天城町の南部から伊仙町にかけて，島の西岸がほとんど20～100m程の断崖で海に落ち込んでいるのに対し，島の東岸はほとんど全面になだらかな隆起珊瑚礁が発達している②。

第1貝塚は，面縄小学校より西約200mの南東に開口する隆起珊瑚礁で形成された狭小な谷状地形にある。遺跡周辺には海砂があり，以前は面縄川の袋状地形まで海が来ていたものと思われる。隆起珊瑚礁崖状テラス部には，貝の散布状態があり貝塚の可能性があった。以前より土器片，磨石等の遺物も採集され，貝塚の広がりが予想された。

第2貝塚は，下面縄集落のほぼ中央を流れる面縄川によって開析された隆起珊瑚礁上に堆積する標高6m程の砂丘上にある。面縄小学校東隣で，第1貝塚の東約250mに位置する。周辺採集の結果，土器片や自然貝殻等がみられた。

遺跡の周辺には，多くの遺跡が研究者等により確認されている。貝塚としては，本川貝塚，喜念貝塚，佐弁貝塚，犬田布貝塚等や貝輪や人骨が検出された洞穴遺跡喜念原始墓，また近年砂丘地外でも遺跡の発見がなされ，標高235mの喜念上泉袋には，土器や石器が多くみられる喜念上原（ウエバル）遺跡や陶・磁器を多く出土するミンツキ集落址③，完形の青磁碗12点が出土した面縄按司城（通称ウガンウスジ）などが知られている。

徳之島での多くの遺跡は伊仙町に属し，しかも南海岸に集中している。時に面縄貝塚群は，昭和初期より多くの研究者によって調査，報告がなされ土器型式等奄美の考古学研究の基礎となっているところである。

① 窪田氏は，昭和10年の三宅博士の調査にも参加された方で，今回の調査区設定等の助言を得た。

② 義憲和「伊仙町の自然・社会環境」　伊仙町誌　1978

③ 義憲和「伊仙町の歴史」　伊仙町誌　1978

第１表　面縄貝塚と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	喜念上原	伊仙町喜念上泉袋	土器，石器　伊仙町誌
2	喜念貝塚	〃　〃　兼久	宇宿上層式　考古学雑誌第11巻５号
3	佐弁貝塚	〃　佐弁東ミヤド	土器，石器，貝塚　伊仙町誌
4	面縄第１貝塚	〃　面縄	貝塚，洞穴遺跡，兼久式，石棺墓，貝輪，市来式，爪形文土器，本文
5	〃　第２　〃	〃　〃	住居址，嘉徳Ⅰ・Ⅱ式　本文
6	〃　第３　〃	〃　〃　兼久	兼久式土器，南方産業科学研究所報告第1巻2号
7	〃　第４　〃	〃　〃　兼久661	面縄東洞式，西洞式，前庭式土器，人骨，奄美自然と文化
8	面縄按司城	〃　上面縄	青磁完形碗　伊仙町誌町歴史民俗資料館展示
9	ミンツキ集落址	〃　伊仙	陶器，汁器　伊仙町誌
10	犬田布貝塚	〃　犬田布連木竿	貝塚，宇宿上層式，南日本文化第３号

＜面縄貝塚関連文献＞

山崎五十磨「鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就いて」　考古学雑誌第20巻10号　1930

小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」史前学雑誌　第４巻３，４号　1932

大山柏・小原一夫「奄美群島徳之島貝塚出土遺物」　史前学雑誌第５巻第５号　1933

三宅宗悦「南島の石器時代に就いて」　ドルメン第４巻６号　1935

三宅宗悦「南島の先史時代」人類学先史学講座第16巻　1940

三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」　考古学第11巻第５号　1940

河口貞徳「南島先史時代」　鹿児島大学南方産業科学研究所報告第１巻２号　1956

河口貞徳共著「徳之島の先史遺跡調査報告」　人類科学第10集　1958

河口貞徳「鹿児島県大島郡兼久貝塚」　日本考古学年報７　1958

国分直一「鹿児島県大島郡面縄第二貝塚」　日本考古学年報７　1958

河口貞徳「奄美の先史諸遺跡」　人類科学第11集　1959

三友国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告　面縄第２貝塚と付近の貝塚」　古代学第８巻２号　1959

九学会連合「奄美その自然と文化」　1959

三友国五郎・国分直一「鹿児島県大島郡徳之島面縄第二貝塚，およびその附近の遺跡調査概報　日本考古学年報８　1959

河口貞徳「南島先史時代の文化交流」　アジア文化第11巻３号

河口貞徳「南島先史時代」　南島文化第２号

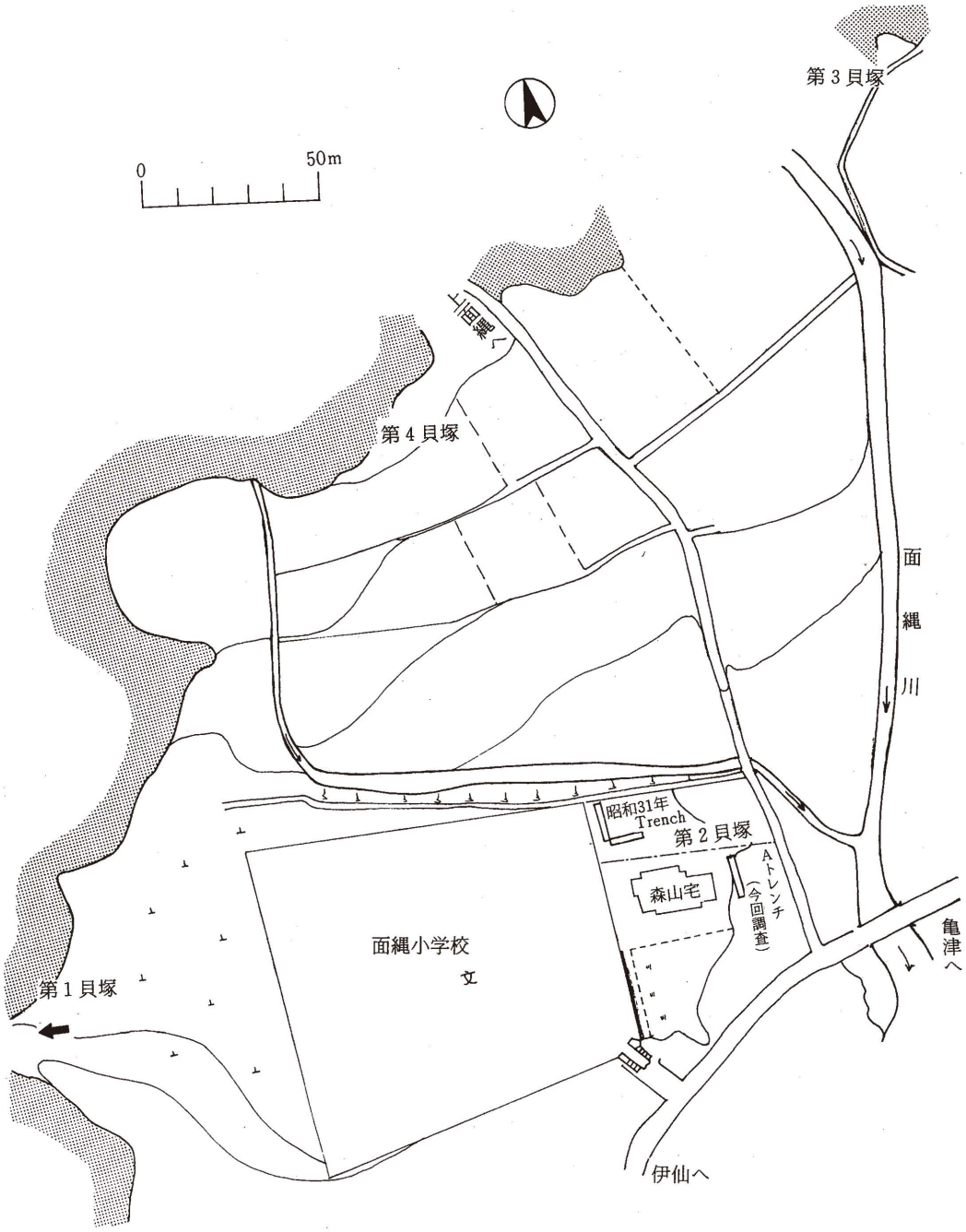
国分直一「南島先史時代の技術と文化」　東京教育大学文学部史学研究第66号　1966

白木原和美「徳之島の先史学的所見」　南日本文化第３号　1970

国分直一「南島先史時代の研究」　考古民俗叢書(10)　1972

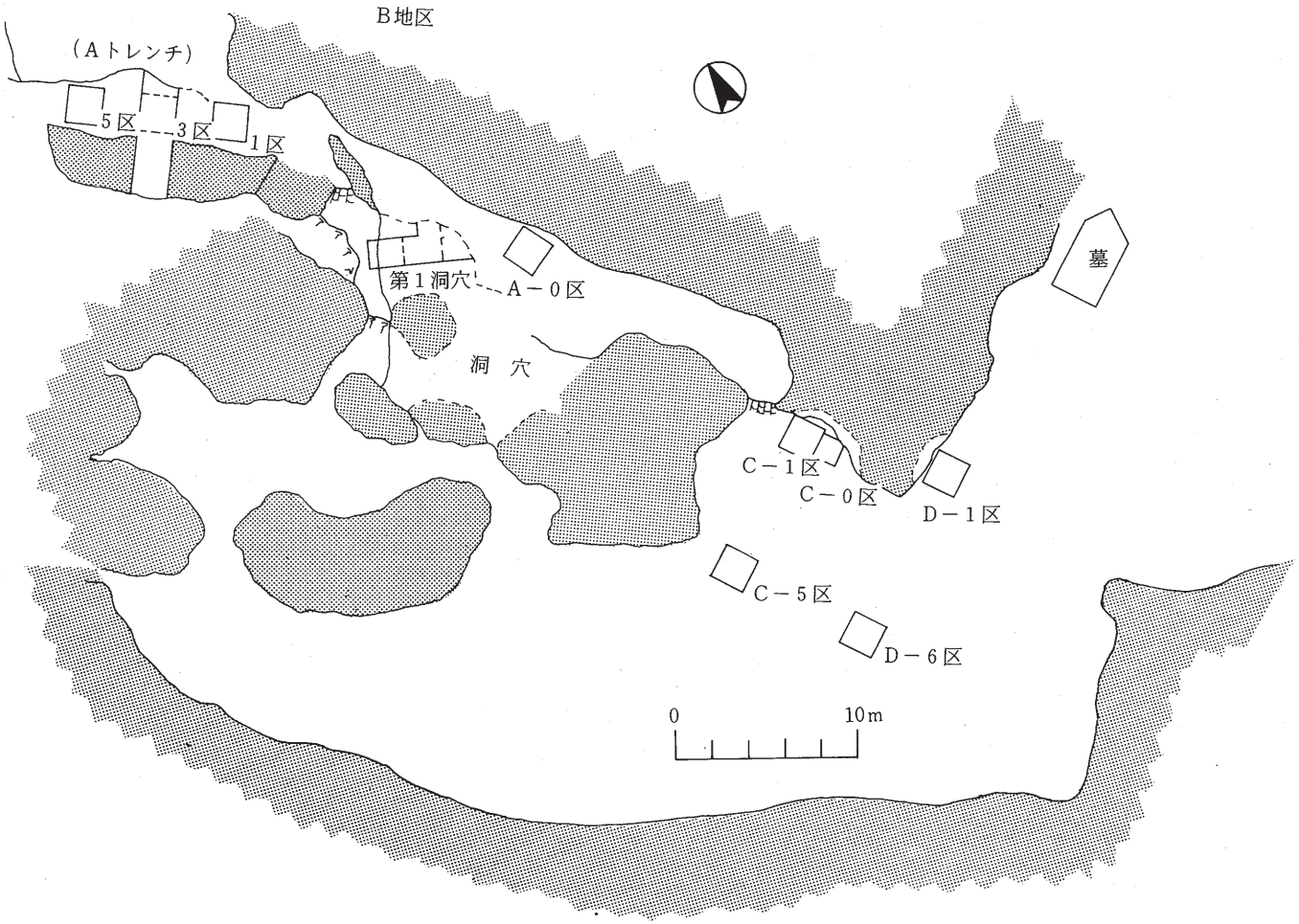
河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第９号　1974

白木原和美・義憲和「大島郡伊仙町の先史学的所見」　南日本文化第９号　1976



第2図　面縄貝塚地形図

注．九学会連合刊「奄美その自然と文化」所載の地形図を参考にして作図した。



第3図　第1貝塚トレンチ配置図

第3章　第１貝塚

第１貝塚は，昭和３年，大村行長氏によって発見され，昭和５年夏広瀬祐良氏が，同年秋に小原一夫氏，昭和10年には三宅宗悦氏が発掘調査され，現在では遺跡は壊滅していると思われていた。第１貝塚は，面縄小学校西方約200ｍ付近の南東に開口する狭小な谷状地形内にある。雑草・樹木が密林化し，昼なお薄暗き地である。以前調査された個所の西側隣接地に同じ珊瑚礁崖のテラス状の地に10ｍ×２ｍの東西に長いトレンチを設定し，Ａトレンチと名称した。２ｍ間隔で区割を行い，東から１…５区と名称し，１・３・５区を調査した。この棚状台地のＡ－１，Ａ－３区より兼久式土器を包含する貝層を確認した。貝を破棄する地点を上の隆起珊瑚礁台地に求め，台地縁辺部に２ｍ×２ｍのトレンチを設定しＢトレンチと名称して調査を行ったが遺物はなく，包含層の確認はできなかった。

昭和初期の以前調査された同テラスの貝の散布がみられる地点に２ｍ×２ｍのトレンチを設定しＡ－０区と名称した。Ａ－０区は表層から約80㎝，石灰岩風化層まで貝層であり，貝層最下部より開元通宝が３点出土した。

Ａ－０区登り口付近の岩陰に1.5ｍ×1.5ｍのトレンチを設定。表層の貝の散布状態の把握に努める。風葬骨と明らかに区別できる人骨が砂層より散布状態で出土，北西部隣接地に２ｍ×２ｍのトレンチを設定Ｃ－１区と名称し，南西部７ｍに２ｍ×２ｍのトレンチＣ－５区を設定する。Ｃ－１区砂層では線刻のある貝製品が人骨と，Ｃ－５区では砂層から市来式土器と貝輪が，その下層からは爪形文土器が出土した。

第１洞穴入口の岩陰に２ｍ×２ｍのトレンチを設定し（Ｄ－１区），南西８ｍに２ｍ×２ｍのＤ－６区を設定した。Ｄ－１区砂層からは山ノ口式系統の土器が出土し，また陶器を共伴する土坑が検出され，人骨が埋葬された形で検出されたが，拡張しての調査が困難な為，写真撮影，断面実測後埋め戻した。Ｄ－６区は，３ｍ程掘り下げたが谷間の一番深いところであり，Ｃ－５区の砂層が検出されないまま調査をやめた。広い面積で効率よく調査すれば，爪形文やそれよりも古い時期のものが包含されている可能性は十分考えられたが，今回の確認調査では無理なところも多かった。

第１節　地層

層位は各地区ごとに紹介したい。

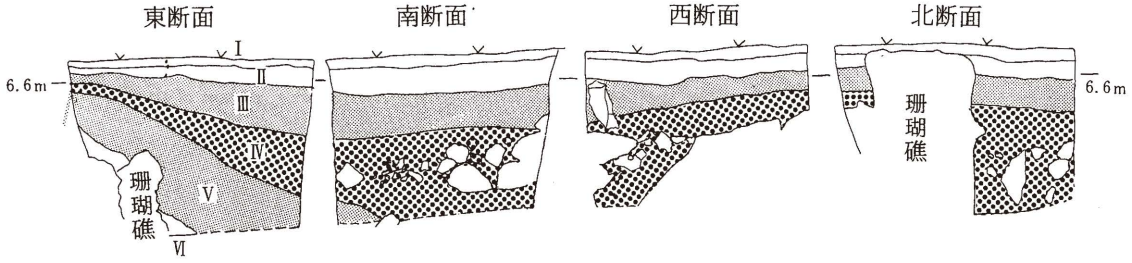
Ａトレンチ（第４図）

第Ⅰ層　表土（黒褐色有機質土）10～20㎝の厚さを有し，南側でやや厚い。

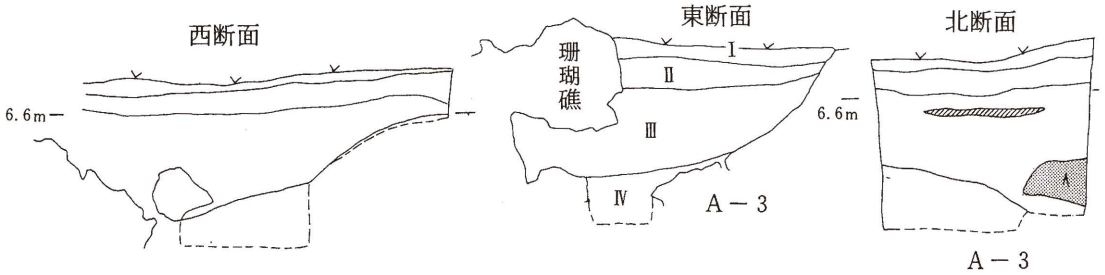
第Ⅱ層　暗灰褐色土層で，ほぼ水平に堆積し厚さは20～30㎝である。青磁・陶器を出土。

第Ⅲ層　黒色混貝層であるが，Ａ－３，５区では貝を含まず黒褐色土層である。上部では青磁・土器片がみられ，下部の混貝層では兼久式土器がみられる。

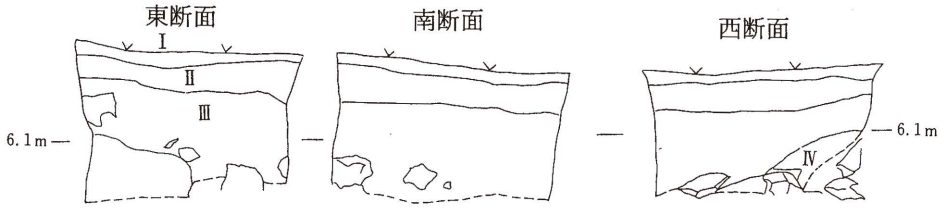
（A－1区）



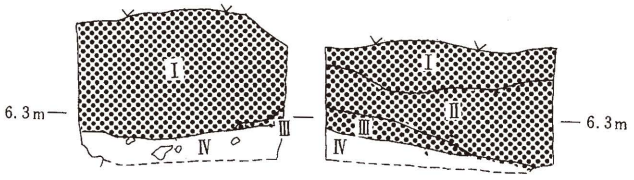
（A－3区）



（A－5区）

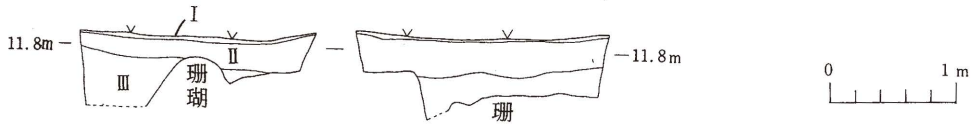


（A－0区）

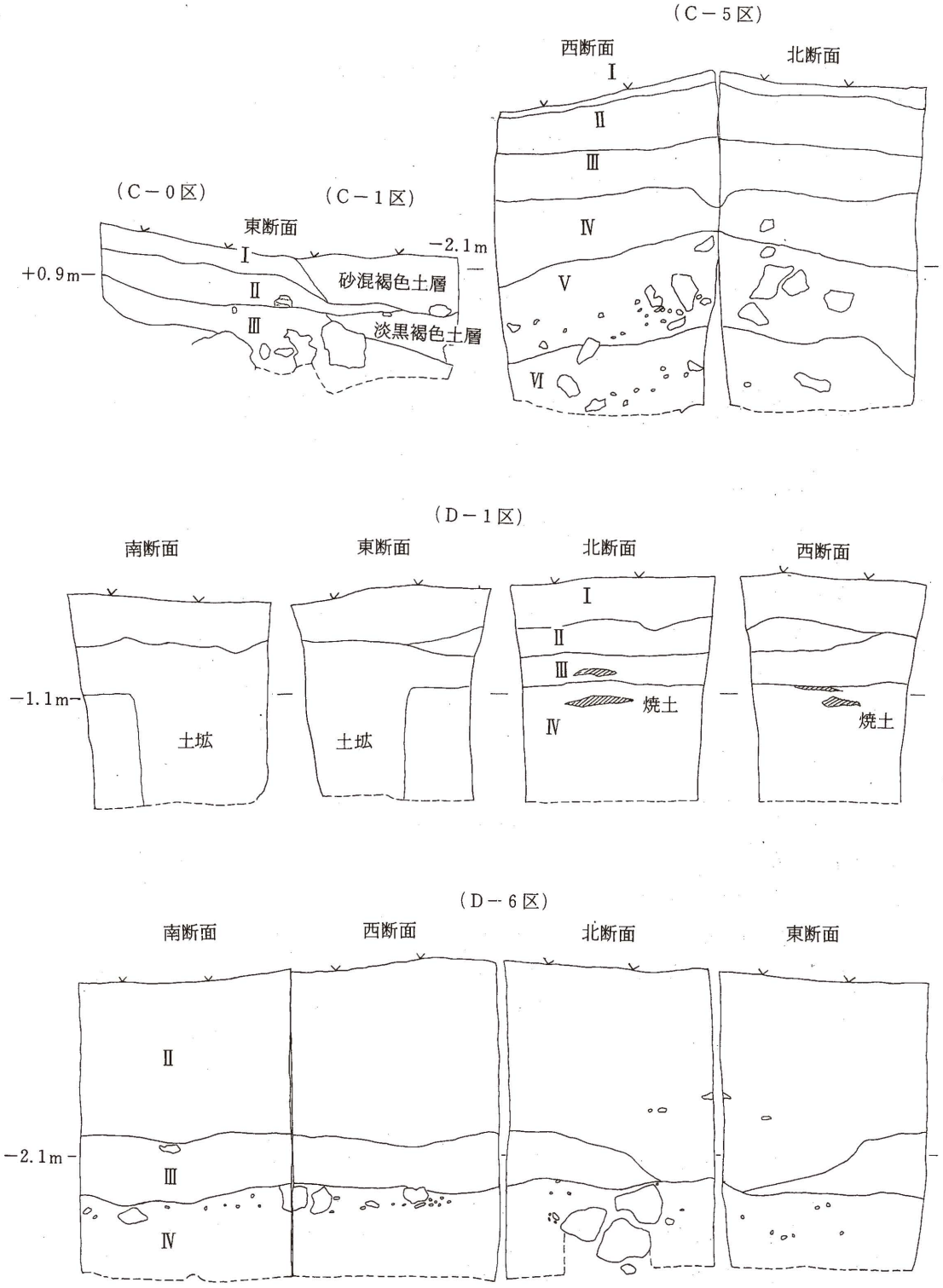


B区
Ⅰ　表層（黒褐色有機質土）
Ⅱ　暗灰褐色粘質土層
Ⅲ　赤褐色粘質土層

（B区）



第4図　　A・Bトレンチ層位



第5図　C・Dトレンチ層位

第Ⅳ層　A－1区にみられ，暗茶褐色純貝層である。兼久式土器と貝製品が出土する。中間部南側で珊瑚礫の堆積がみられる。

第Ⅴ層　暗茶褐色混貝土層で東から南部へ傾斜している。

第Ⅵ層　暗茶褐色石灰岩風化土層であり，遺物は出土していない。いわゆる地山である。

A－0区（第4図）

第1層，第Ⅱ層，第Ⅲ層，純貝層である。北断面では黒褐色，褐色，灰色と色別出来るが西断面では判別出来なかった。兼久式土器と貝製品が出土した。下層に開元通宝が3点出土した。

第Ⅳ層　暗茶褐色石灰岩風化土層で，上部から面縄前庭式が出土した。

C－0・1区（第5図）

第Ⅰ層　表土（茶褐色土層）で20cmの厚さを有し，C－1区では風葬跡のため攪乱されている。

第Ⅱ層　黒褐色混貝層で南に傾斜し，消滅している。A－0区の貝層の混入と思われる。兼久式土器が出土する。

第Ⅲ層　明茶褐色砂層で珊瑚礫が混入している。人骨が散在し，線刻のある貝製垂飾品の出土がある。

C－5区（第5図）

第Ⅰ層　表土（黒褐色土層）で5～10cmの厚さである。

第Ⅱ層　茶褐色粘質土層で40～50cmの厚さで南東部へ傾斜している。

第Ⅲ層　暗茶褐色粘質土層で40～50cmの厚さを有する。

第Ⅳ層　黄茶褐色粘質のある砂層で50～70cmの厚さを有する。遺物は含んでいない。

第Ⅴ層　淡茶褐色粘質のある砂層で70～80の厚さを有し南東部へ傾斜し，珊瑚礫が混入している。出土遺物は，市来式土器とオオツタノハ製貝輪等である。

第Ⅵ層　黄茶褐色粘質のある砂層で珊瑚礫と人骨が散在し，爪形文土器が出土した。

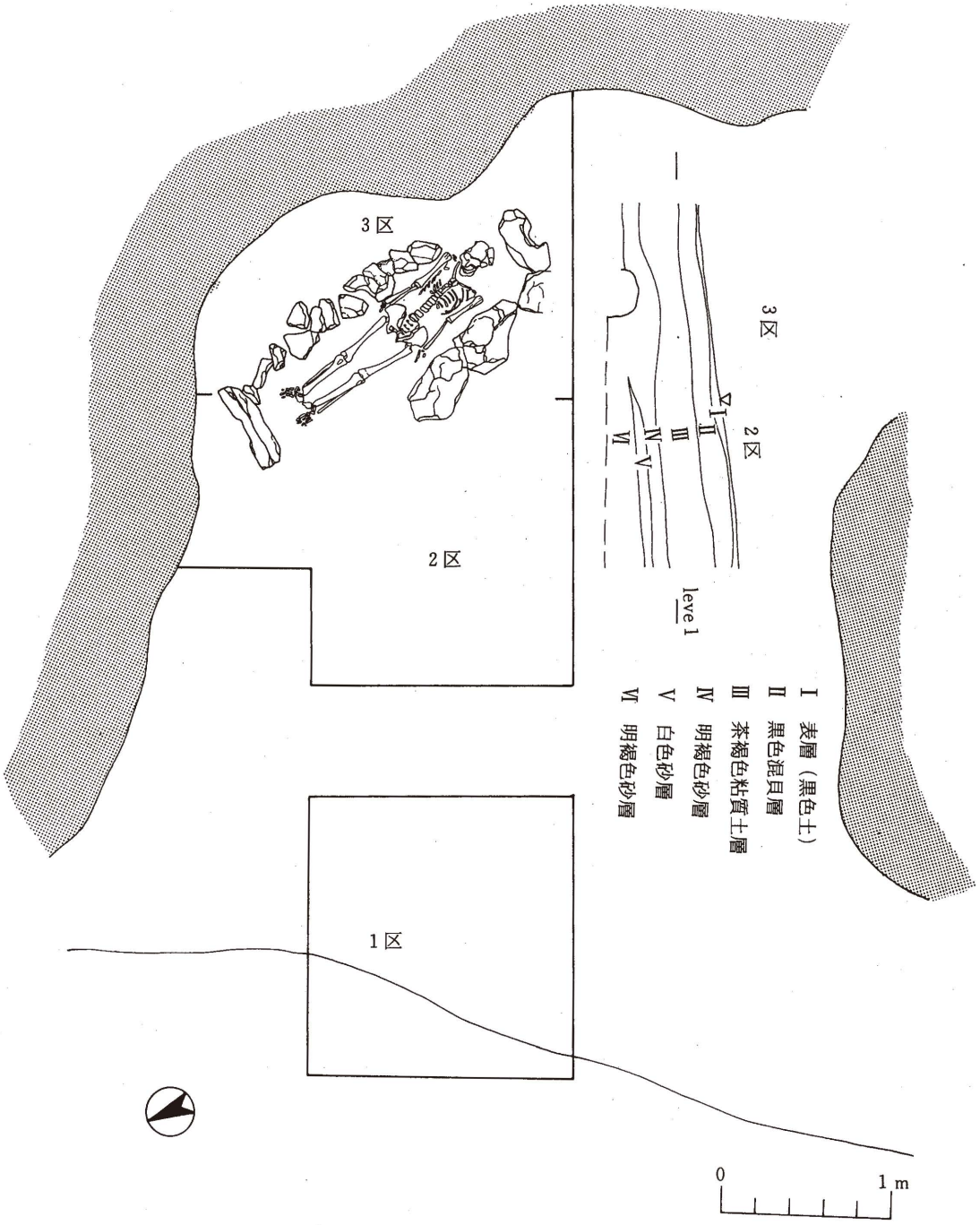
D－1区（第5図）

第Ⅰ層　表土（粘質赤褐色土層）で40～50cmの厚さを有する。

第Ⅱ層　褐色土砂混粘土層で岩陰の方に厚くなり南部では消滅する。風葬骨を検出。

第Ⅲ層　褐色土砂混粘質の強い層で，青磁，陶器を含み土坑内の埋土でもある。

第Ⅳ層　褐色粘質層で山ノ口式系統の土器が出土した。



第6図　第1洞穴遺構と断面

D－6区（第5図）

第Ⅰ層　表土は薄く，Ⅱ層との境目がはっきりわけられなかった。

第Ⅱ層　茶褐色粘質土層で180～200cmの厚みを有する。石灰岩風化層が谷に堆積したものと思われる。

第Ⅲ層　暗茶褐色粘質土層で40～50cmの厚みがある。

第Ⅳ層　黄茶褐色小礫混砂層で，土器片の磨耗の厳しいものが2・3点出土したが型式等は不明である。

第2節　遺構

第1貝塚は，貝塚，洞穴，開地の遺跡である。2m幅のトレンチ調査を行ったのであるが，遺構は，第1洞穴に埋葬施設が検出された。その他のトレンチにおいても人骨の散布状態があり埋葬址等の遺構も想定される。

第1洞穴の遺構は，箱式石棺墓である。当初，1・2区の調査中，第Ⅳ層（明褐色砂層）の掘り下げ中，トレンチ東側に石灰岩礫が出土し，2ケほど取り上げた後，人骨の出土をみた。そのため，洞穴壁面まで拡張し，人骨検出にかかる。洞穴壁面側は，石灰岩塊の落石がみられ1点ずつ確認し取り上げた。この石灰岩塊の間にも人骨が散布していた。

石灰岩塊を取り除いていくと，2個の大形石灰岩塊と第7図の**10,11,12**の土器が出土した。それを取り除き，約20cm程掘り下げると第6図の様な箱式石棺墓の検出をみた。

石棺は，第Ⅵ層に埋葬され，左側石に4ケの大形石灰岩塊を，右側石には14ケの石灰岩塊を使用し，両小口には扁平な石灰岩塊を使用し，頂部は中央部を削りとった状態である。頭骨右の側石はみられなかった。被葬者は仰むけの伸展葬で棺内には遺物はみられなかった。棺内には白砂が埋土され，遺跡外よりの搬入も考えられる。頭位は，S－78°－Eである。人骨についての詳細は，松下氏の所見を別掲に記載した。

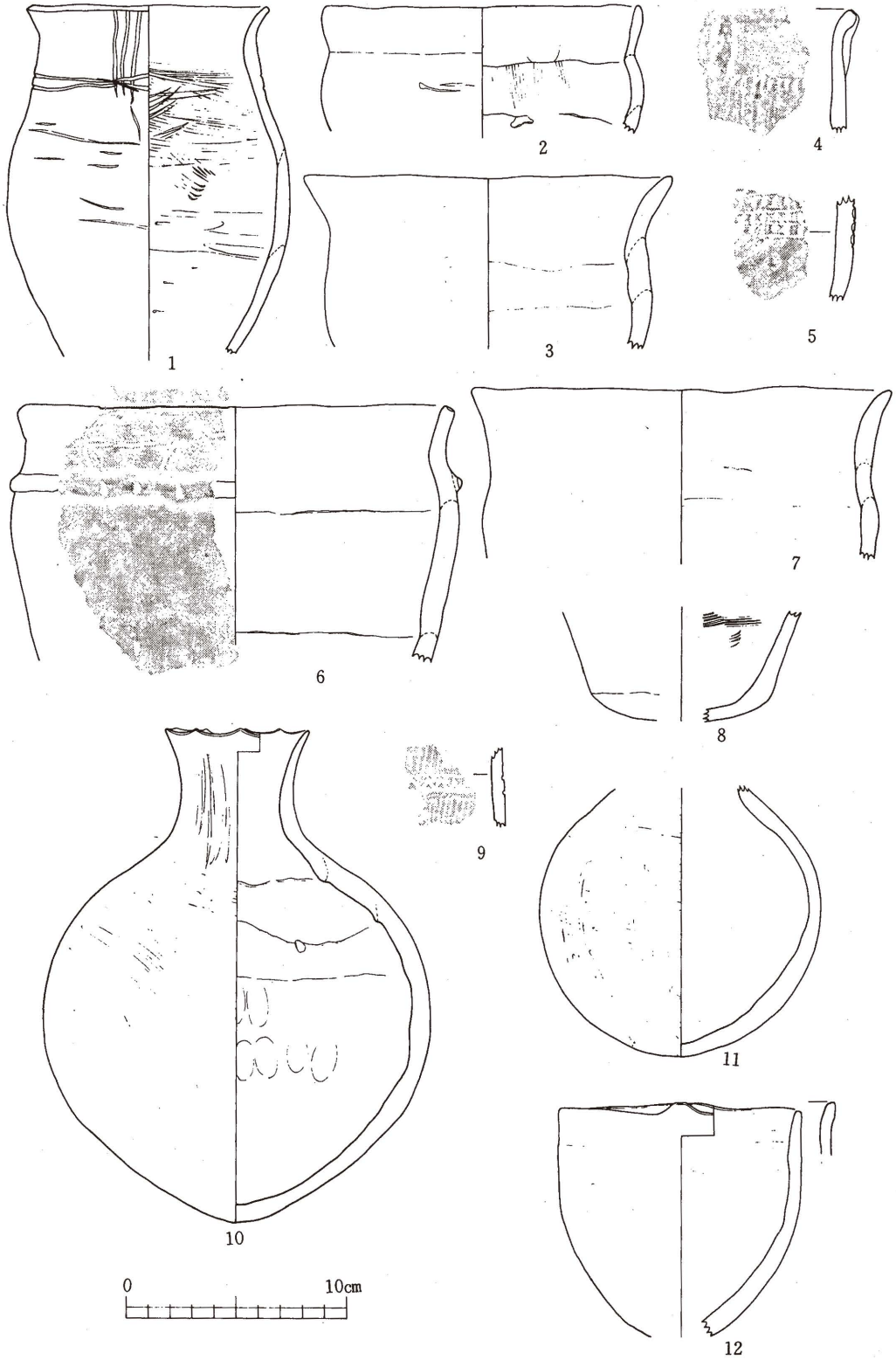
第3節　遺物

1　土器

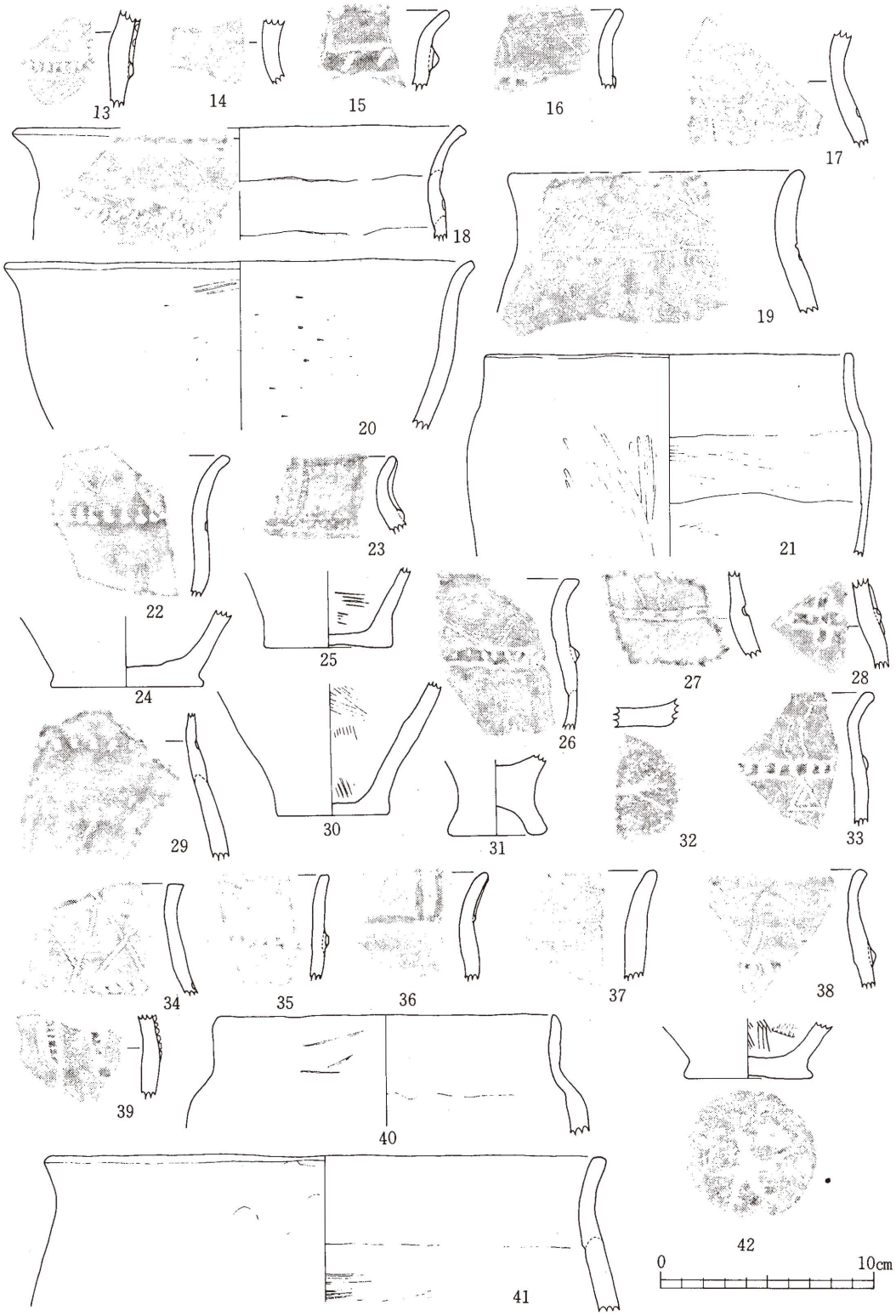
第1貝塚は地点ごとに様相が異なり，一概に言えないのでここでは，第1貝塚出土の土器を分類したのち，良好なもの，特徴的なものを出土地点，層位ごとにまとめて掲載した。個々の土器は表2にまとめた。

1～12は，洞穴出土の土器である。特に**10,11,12**は，石棺の上部より出土し，供献土器と思われる。いずれも外表面をていねいに研磨し，丸底もしくは尖り気味の丸底を呈す。**10**は波状口縁をなし，突出は8ケ所前後であろう。**12**は，一ケ所明確に突出し，二対称にゆるやかな波状をなす。なお，同一層より，抉入石斧（第15図75）が出土している。

13～32は，Aトレンチより，**33～46**はA－0区より出土した土器である。**46**を除き，すべて兼久式土器の範疇に属するものであろう。胎土は，石英と細砂をわずかに含む，よく精選され

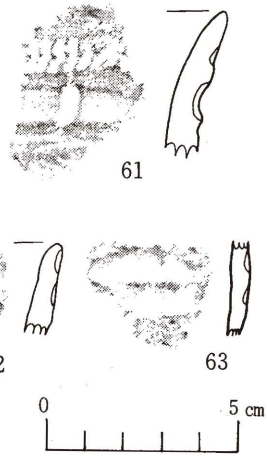


第7図　第1洞穴出土土器



第８図　Ａトレンチ出土土器

第9図　A－0区・C・Dトレンチ出土土器



第10図　C－5区出土土器

たもので，色調は褐色をベースとし，焼成は良好である。調整ハケ目は貝殻の使用が考えられる。文様は頸部に断面三角形の刻目凸帯，あるいは連続刺突，沈線を組み合わせたものを中心として，またそれぞれ単独に文様をなすこともある。その他，縦位に，凸帯，刻目凸帯，帯に刺突を施したものを貼りつける。無文の口縁破片も多く存在するが個体としてまったくの無文とは断定できないまでも，図示した他，かなり無文の土器を共伴している。文様で，型式分類を試みたが，A－1区においては，Ⅲ，Ⅳ層，A－D区においてはⅠ，

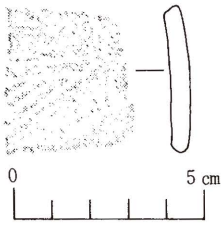
Ⅱ層，A－3区においてⅢ層と，それぞれ統計上の差は認められなかった。底部は平底が圧倒的で，例外として，脚台をなすもの（**31**），やや角のとれたもの（**45**）があるのみである。
木葉痕をもつものは4点（**32,42,43,56**）出土しているが，第1貝塚の兼久式土器においては，木葉痕をもたないものが主である。

46は，第1貝塚共通の基盤層である石灰岩風化土の赤褐色粘質土層上部から出土したもので凸帯沈線文土器で面縄前庭式である。A－D区の貝層下の層位より出土した。

47～59は，C－1区出土土器である。**47～56**は兼久式土器でⅡ層の黒褐色混貝土層から出土している。**52**は壺形土器である。**57～59**は，C－1区，Ⅲ層の明茶褐色砂層から出土し，**57**は口縁部に凸帯，頸部にも凸帯を施し，縦位凸帯で結び，凸帯にそれぞれ半載竹管状施文貝で連続刺突文を施し，凸帯間にも横位に同様の刺突文を施している。**58**は，羽状に細い沈線を施すものである。**59**は丸底である。**57,58**は琉球系の土器であろう。

60は，D－1区，Ⅳ層上部で出土した土器で山の口式系統の土器であろう。

第10図**61**は，C－5区は，Ⅴ層，淡茶褐色砂質層出土の市来式土器で，貝輪（第12，13図）人骨と共伴する。また同区，Ⅵ層の黄茶褐色粘質のある砂層からは爪形文土器茶の指頭押圧文土器2点（第10図**62，63**）かやはり人骨と共伴する。C－5区は，隆起珊瑚礁崖の下にあり，転石と流水作用で層位が形成されている。



第11図　土製品

これら遺物等から，各トレンチの層位を照合すると，C－5区，Ⅵ層（黄茶褐色粘質のある砂層）は縄文時代早・前期，Ⅴ層（淡茶褐色粘質のある砂層）は，縄文時代後期が推定される。C－0・1区のⅢ層（明茶褐色砂層）と，C－5区の砂層，D－1区のⅣ層（粘質のある砂質褐色土層）の層位は同時期と比定され，時期としては，縄文時代後期から弥生時代中期と推定される。このことは，洞穴内の遺物に関しても時期のきめてになると思う。洞穴内の層位の堆積状況と，岩陰あるいは平地での堆積状況は異なるかもしれないが，箱式石棺墓及び供献土器（**10,11,12**）は，砂層の上部でありまた抉入石斧の共伴，壺形土器，小形鉢等から弥生時代前期から中期に推定したい。

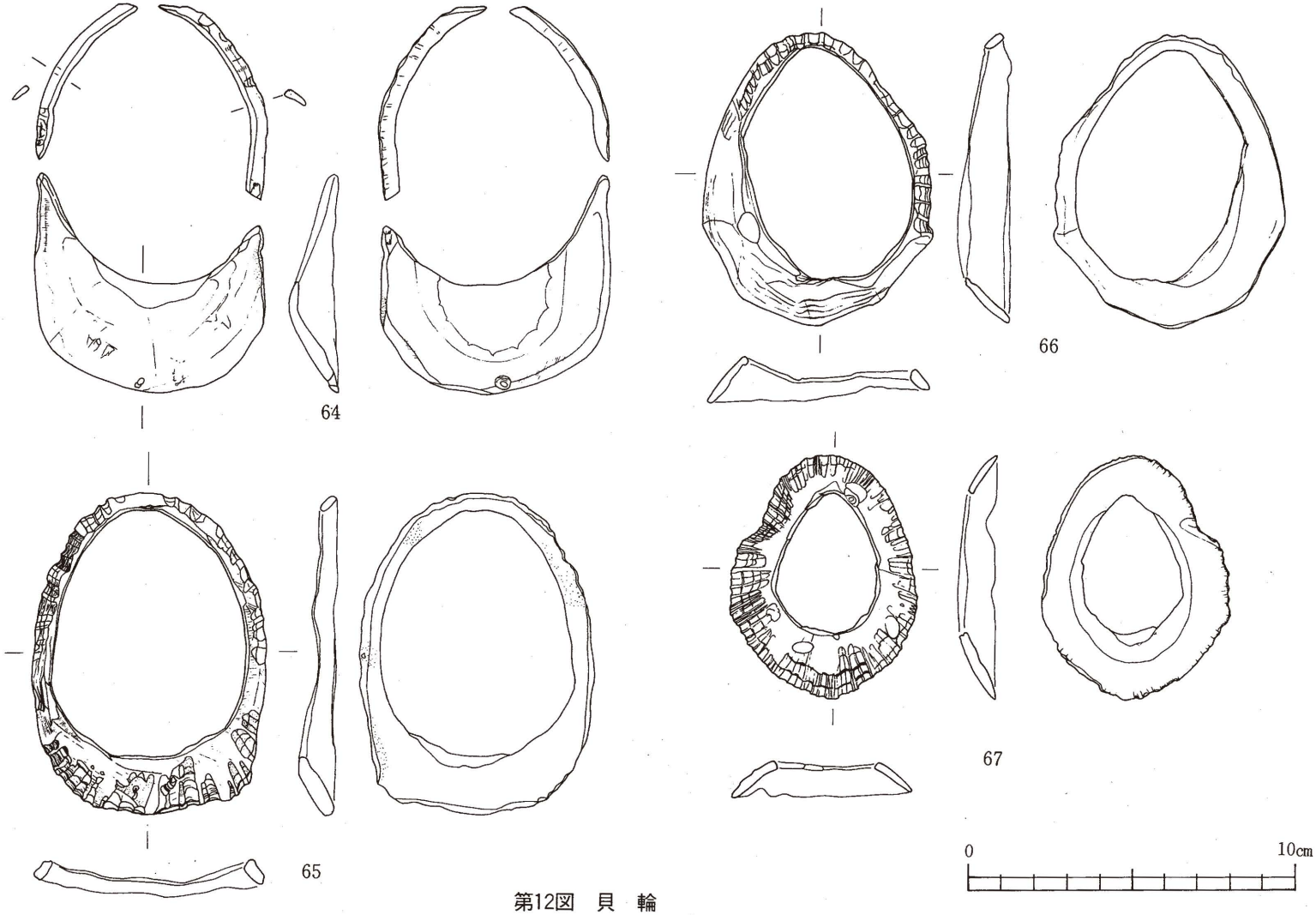
第11図は，最大幅3.8cm，厚さ0.65cm，現存最大長3.5cmの中央部に線刻のある土製品である。貝符に類似したもので，何らかの影響があるのではなかろうか。A－0区，2層出土で赤褐色を呈す。

表2　土器分類表

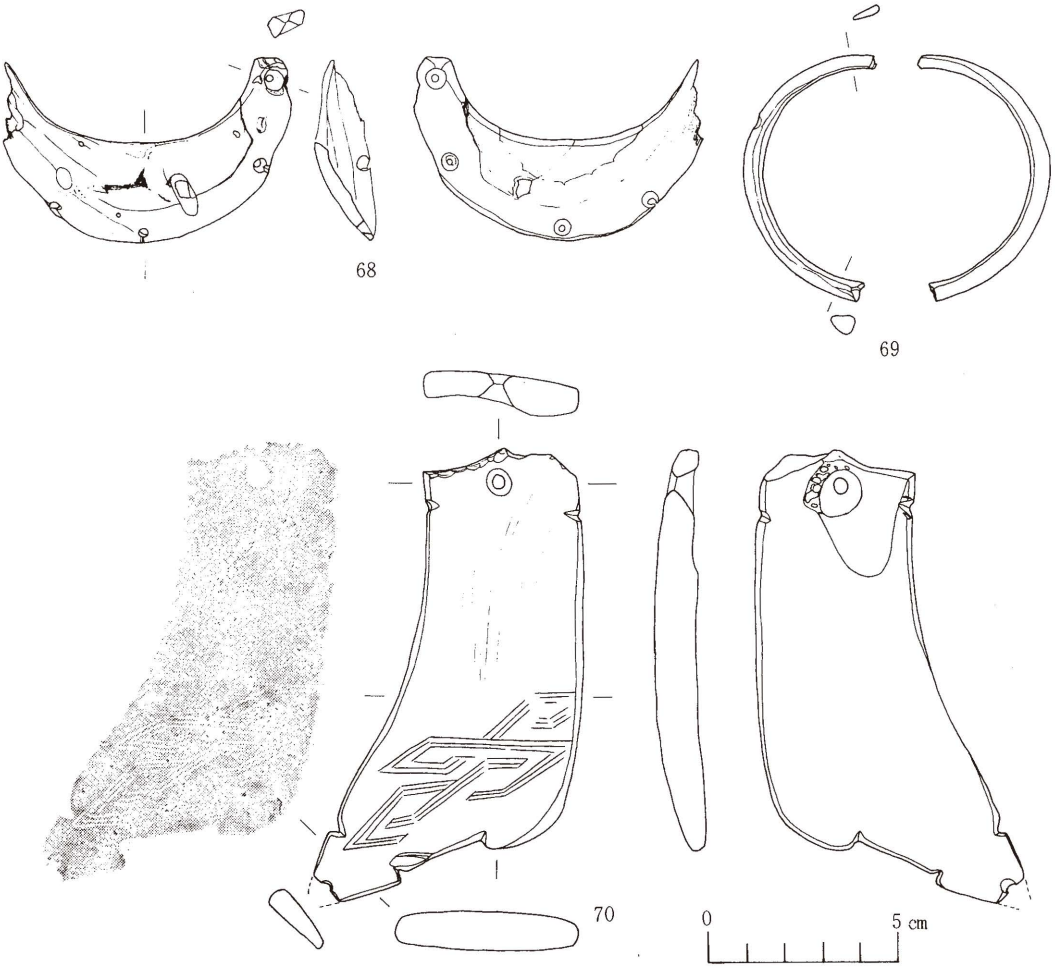
挿図番号	出土地点層位	調整(土器上部より順に記述)	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
1	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目，ヘラナデ	暗赤褐色	淡赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
2	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，一部ヘラ痕 内～ナデ，縦ハケ目，後ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
3	洞穴1区Ⅱ層	ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
4	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，内～不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	連続刺突は貝殻

挿図番号	出土地点層位	調整(土器上部より順に記述)	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
5	洞穴1区Ⅱ層	ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
6	洞穴1区Ⅱ層	ナデ	暗褐色		良好	石英砂を多く含む	
7	洞穴3区Ⅰ層	ナデ	淡赤褐色		良好	細砂を多く含む	指頭圧痕が目立つ
8	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，内～ハケ目	灰褐色	赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
9	洞穴3区Ⅲ層下部	不明，文様は鋸歯状沈線の上下に，ヘラ連続刺突	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
10	洞穴3区Ⅲ層下部	外～ヘラ磨き，内～ナデ	赤褐色	黄褐色	良好	細砂をわずかに含む	波状口縁
11	洞穴3区Ⅲ層下部	外～ヘラ磨き，内～ナデ	暗赤褐色	淡赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
12	洞穴3区Ⅲ層下部	外～ヘラ磨き(縦)，内～ヘラナデ	黒色	淡黄褐色	良好	細砂をわずかに含む	ヘラ接着面不明瞭
13	A－1区Ⅲ層	不明	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
14	A－1区Ⅲ層	ナデ	黄褐色		良好	細砂をわずかに含む	
15	A－1区Ⅳ層	ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
16	A－1区Ⅳ層	ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
17	A－1区Ⅳ層	ナデ	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
18	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目後ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
19	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～ハケ目後ナデ	褐色		良好	細砂をわずかに含む	
20	A－1区Ⅳ層	外～ハケ目一部，内ナデ	黒色	褐色	良好	細砂をわずかに含む	ナデはヘラか貝ガラで行なわれた
21	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，カイガラナデ 内～ナデ，ハケ目	暗褐色	赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
22	A－1区Ⅱ層	外～ハケ目，内～ナデ	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
23	A－1区Ⅱ層	ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
24	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～不明	暗褐色	赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
25	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～ハケ目後ナデ	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
26	A－3区Ⅲ層	不明	赤褐色		良好	砂粒を多く含む	
27	A－3区Ⅲ層	外～ハケ目，内～不明	赤褐色		やや軟質	細砂を若干含む	
28		不明	黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
29	A－3区Ⅲ層	外～ナデ，内～ナデハケ貝	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	Ⅲ層最下部
30	A－3区Ⅲ層	外～不明，内～ハケ目	黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	Ⅲ層最下部
31	A－3区Ⅲ層	不明	淡褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	Ⅲ層最下部
32	A－3区Ⅲ層	不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に木葉痕

挿図番号	出土地点層位	調整(土器上部より順に記述)	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
33	A－D区Ⅰ	外～ナデ，内～不明	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
34	A－D区Ⅰ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目	暗褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
35	A－D区Ⅰ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目	暗赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
36	A－D区Ⅱ	外～ハケ目(縦)，内～ナデ，ハケ目	明赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
37	A－D区Ⅱ	ナデ	褐　色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
38	A－D区Ⅱ	ナデ	褐　色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
39	A－D区Ⅱ	外～不明，内～ハケ目	暗褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
40	A－D区Ⅰ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目(縦)	赤褐色	黄灰色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
41	A－D区Ⅱ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目後ナデ	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
42	A－D区Ⅰ	外～ナデ，内～ハケ目	褐　色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に木葉痕か？
43	A－D区Ⅱ	外～ヘラミガキ，内～不明	褐　色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に不明痕
44	A－D区Ⅱ	外～ナデ，内～不明	暗黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
45	A－D区Ⅱ	外～ナデ，内～ハケ目	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
46	A－D区Ⅳ	不明	赤褐色		やや軟質	細砂を多く含む	面縄前庭式
47	C－1区Ⅰ	ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	文様は半載竹管状用具による施文
48	C－D区上	外～ナデ，ハケ目後ナデ 内～ナデ，ハケ目後ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
49	C－D区Ⅱ	外～不明，内～ハケ目	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
50	C－D区Ⅱ	不明	黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
51	C－1区Ⅱ	外～ナデ，ハケ目後ナデ 内～ナデ，ハケ目	黄褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	浅い沈線(2～3条)
52	C－D区Ⅱ下	外～ハケ目，内～不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
53	C－D区Ⅱ	外～ナデ，内～ハケ目	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
54	C－D区Ⅱ	外～ハケ目，後ナデ，内～ハケ目	暗黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	あげ底
55	C－D区Ⅱ	不明	暗赤褐色	黒　色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
56	C－D区Ⅱ	外～ナデ，内～ハケ目	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に木葉痕
57	C－D区Ⅲ	不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	半載竹管状工具による連点
58	C－D区Ⅲ	外～ヘラミガキ，内～不明	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	羽状に沈線
59	C－D区Ⅲ	外～不明，内～一部ハケ目	黄褐色	黒　色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
60	D－1区Ⅳ	外～ナデ，内～不明	暗黄褐色	黒　色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	山ノ口式土器



第12図　貝　輪



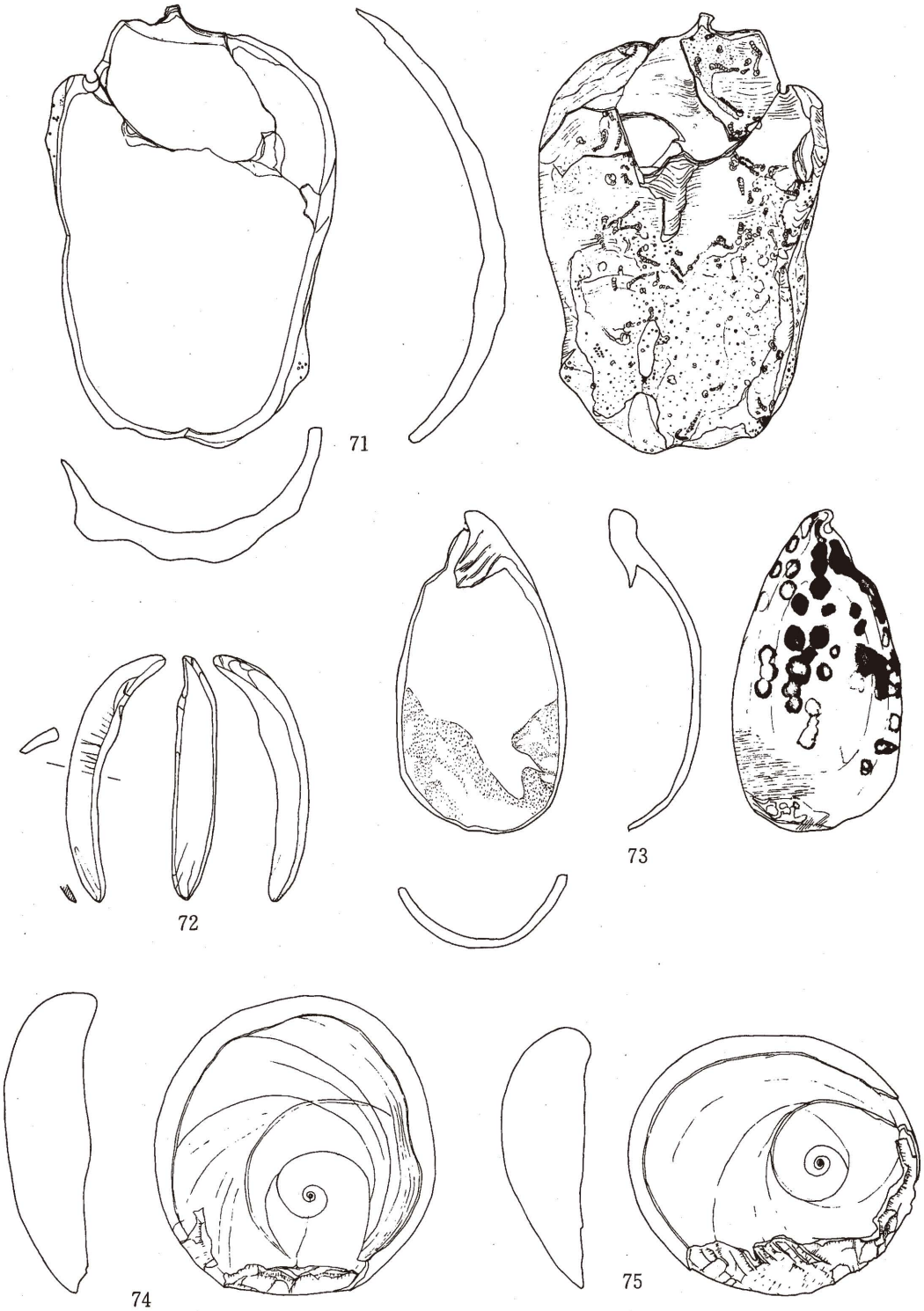
第13図　貝輪，貝製品

貝製品（第12図～第14図）

多量の貝製品が得られた。特徴的なものだけを図示し，全ての遺物紹介は後日の機会にやりたい。貝製品は，それらの用途によって装飾品と実用品に大別でき，前者は貝輪，垂飾品，有孔貝製品などで，後者は，螺蓋製貝斧，貝匙，貝容器などがある。

貝輪は９点出土し，オオツタノハを素材として用いたもので，殻頂部を除去して環状に外縁部を有するものが主で，完全輪になっているものと，半月形の穿孔を施こしたものとに分けられる。素材はオオツタノハ（８点）とサラサバテイ（１点）の二種に大別できる。オオツタノハの８点全て，Ｃ－５区，Ⅴ層の出土で，珊瑚塊の転石が多く，散在した人骨の間に貝輪が検出された。人骨は散在していたので，貝輪と人骨との関連は得られなかった。共伴遺物に市来式土器がある。

64と**65**は重なって出土した。**64**は研磨により放射肋の凸凹を削り取っている。完全輪の貝輪



第14図　貝製品

でなく，三つに分かれ，両端にヒモずれ痕等がわずかに見られることより，三つの部分を繋いで貝輪の用途をなすものと思われる。腹縁部の広いものには，腹縁中心部に内側から穿孔している。重量は29.4ｇである。**65**は完全輪で，殻長9.9cm，幅7.2cm，孔長7.6cm，幅5.6cm，幅5.9cmで重量は23.7ｇであり，局部的に研磨がみられる。**64**と**65**は，出土状態より２点で一対の役割をはたしていたものと思われる。**66**もオオツタノハの殻頂部を除去して環状に外線部を有し，広狭の部分がある。殻長8.9cm，幅7.0cm，孔長7.0cm，幅4.8cmで重量22.3ｇであり，やはり研磨され，放射肋の凸凹を取りさっている。**67**も同じくオオツタノハを素材とし，外套線の内側の殻長部を除去した。殻長7.5cm，幅5.8cm，孔長4.2cm，幅3.0cmの小形の貝輪である。**68**は，オオツタノハを素材とし，内側より２ケ所，外側より２ケ所，両側からの穿孔が２ケ所認められる。放射肋の凸凹は研磨により完全に削りとられ，縁部の穿孔にはヒモずれ痕がみられる。これも**64**と同様完全輪でなく，最初から半月形として作ったものであろう。類似品が，犬田布貝塚①，喜念原始墓②から出土していて貝製装身具とされているが，**64**の貝輪同様，貝輪としての用途も考えられよう。重量は20.4ｇである。**69**は，唯一のサラサバテイを素材にし，殻の体層部を横に切断して内部を敲打により取り去り，その後研磨したもので半円形を呈している。完全輪であったのか不明であるが，両端は破損している。殻長6.5cm，孔長5.4cm，重量6.1ｇで現在でも真珠膜がみられる。Ｄ－１区，Ⅳ層上部より出土したもので，共伴遺物には山ノ口式系統の土器がみられ，また，同区のⅢ層には陶器を共伴する土坑があった。人骨の出土をみたが，拡張できずすぐ埋め戻し，将来の調査にゆだねた。

70は，ゴホウラの外唇部を切り取り，研磨によって形を整え，両端に内外からの穿孔を施こし上唇部の先端は欠損している。穿孔の近くに抉りがみられ，また，表面には三本の線が幾何学的に線刻されたものである。貝符的意味あいを持つ垂飾品とも考えられる。Ｇ－０区，Ⅲ層より出土し，人骨の散在した層位であった。重量は，123.5ｇである。

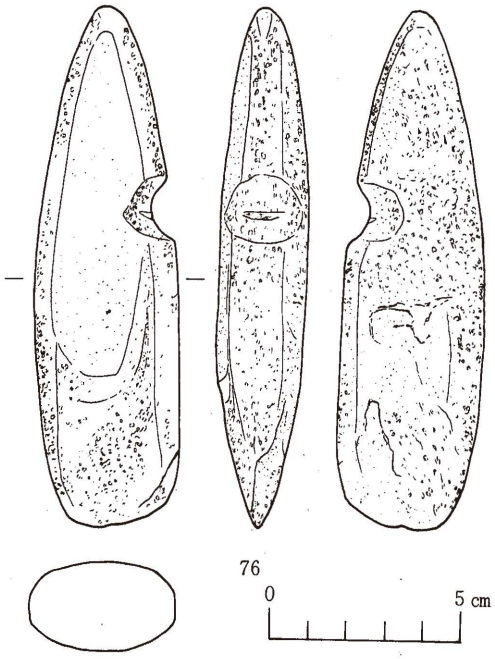
71は，夜光貝の体層部を素材とし，曲部を中心に敲打整形したもので，一端は欠落しているがほぼ完形品である。縁部は研磨により整形されている。重量は34.2ｇである。Ａ－１区，Ⅲ層の貝層中より出土し，貝容器としてとりあげた。３点出土した（図版15）。

72は，ムラクモタカラガイの体層部を半分に切り取り，敲打整形したもので，一端の歯状刻を取手部に利用している。入念な調整はみられない。重量は；9.4ｇである。Ａ－１区，Ⅰ層で出土している。

73は，ヘラ状貝器である。貝の腹縁部を切り取り，研磨によってヘラ状に仕上げたものである。Ａ－１区，Ⅲ層の貝層中からの出土である。

74, 75は，螺蓋製貝斧である。最初，名称を貝斧で統一していたが，諸文献にも統一性がなく，貝斧のみでは誤解を生むおそれもあるため，三島格氏の螺蓋製貝斧の名称③を使用することにした。総数10点出土する。夜光貝の蓋の薄い縁部に敲打により刃部をつくり出している。いずれも刃縁は鋭い。**74, 75**ともＡ－０区，Ⅱ層の貝層中より出土した。また，その他の螺蓋製貝斧は，出土地は別々であるが，全て貝層中よりの出土である。

①白木原和美「徳之島の先史学的所見」　南日本文化第３号　1970
②三宅宗悦「大隅国徳之島喜念原始墓花出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就いて」　1941
③三島格「螺蓋製貝斧」賀川光夫先生還暦記念論集　1982



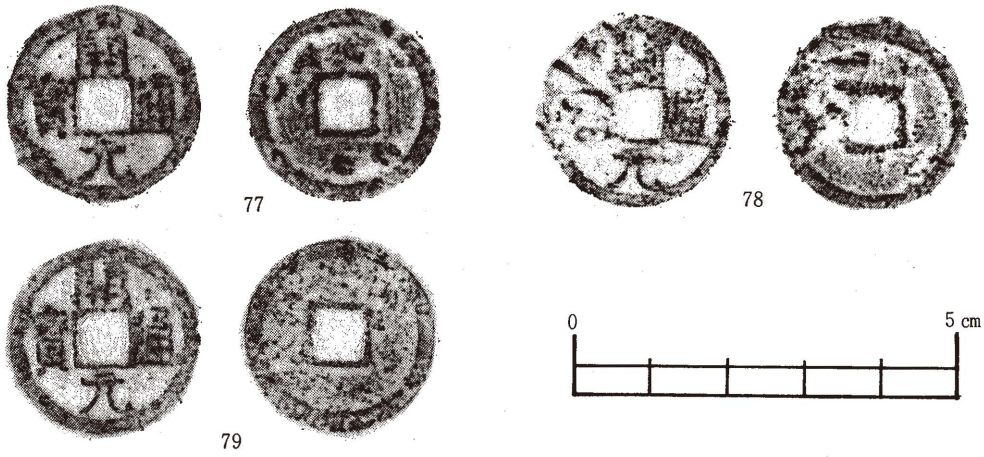
第15図　拓入石斧

石器

76は，第１洞穴，Ⅵ層より出土したもので長さ13.6cm，幅3.8cm，厚さ2.3cmの軟弱な砂岩を石材に用いた抉入のある石斧である。敲打によって全体を整形し，抉りを一か所作っている。刃部と抉り部の位置が，今までの抉入石斧と逆である。抉入部に使用による研磨部がみられる。

古銭

古銭は３点出土した。Ａ－０区貝層下部からの出土であり全て「開元通宝」である。昭和５年の小原氏の発掘の際も貝層下部より１点出土している。貝層は兼久式土器の出土があり兼久式土器の編年上，貴重な資料といえる。



第16図　古銭拓影（1/1）

小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」史前学雑誌第４巻３・４号　1932

第4章　第2貝塚

第2貝塚は，昭和5年，小原一夫氏によって発見され①，昭和10年三宅宗悦氏の調査によると第2貝塚は，下面縄部落のほぼ中央を流れる面縄川によって開析された隆起珊瑚礁上に唯積する標高6mほどの砂丘上にあり，この独立砂丘をとりまくように面縄川の支流が流れている。この流れに接近する砂丘の東縁及び北部は急傾斜をなし，崖状になるところもある。貝塚は台地の東北部，部落の密集する裏手，珊瑚礁の石垣にとり囲まれた小学校敷地に接する附近にある②。とあり，昭和28年8月河口貞徳氏，昭和29年8月三友国五郎，国分直一氏③，昭和31年8月九学会調査の試掘の結果からみると，第2貝塚の範囲は，小学校の石垣に接し，南にある森山氏宅地を区切る土手に囲まれた，南北25m，東西約40mの区域が中心であったと推定される④。とあり，第2貝塚の位置に若干の相違がみられる。これは，昭和10年発掘地は畑地と面縄川支流の改修工事により滅失したものと思われる。今回の調査区は，九学会調査区の隣接地，森山信義氏宅の東側畑地で12m×2mの南北に長いトレンチを設定し，北から1．2……6区と2mの区割りを行い，2．4．6区の調査を行った。

その結果，A－2区，A－4区は，間層をはさんで嘉徳Ⅱ式土器と嘉徳Ⅰ式土器の包含層が確認され，A－2区のⅤ層（暗灰褐色砂層）からは住居址と思われる遺構を検出した。A－6区はガラス片，セメント塊等が検出され，攪乱層であった。

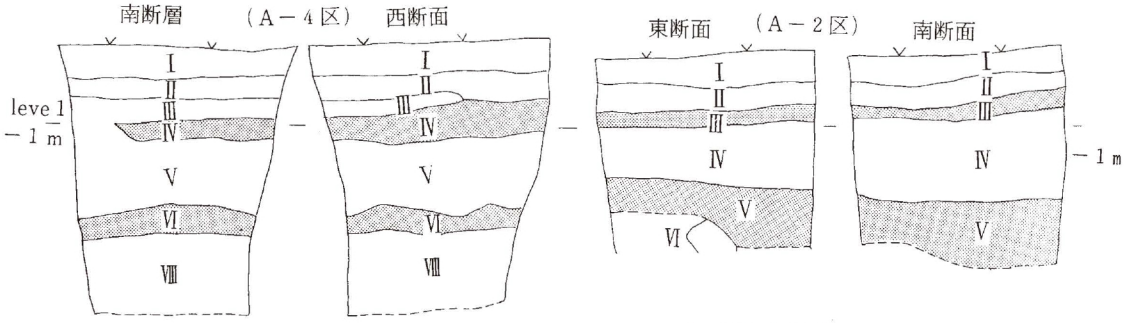
①大山柏・小原一夫「奄美群島徳之島貝塚出土遺物」史前学雑誌第5巻第5号　1933

②三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学第11巻第5号　1940

③三友国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告－面縄第2貝塚と付近の貝塚」
古代学　第8巻2号　1959

④九学会連合『奄美その自然と文化』　1959

第1節　層位



Ⅰ　黒褐色有機質砂層
Ⅱ　淡茶褐色砂層
Ⅲ　白色砂層
Ⅳ　黒褐色砂層
Ⅴ　白色砂層
Ⅵ　暗灰褐色砂層
Ⅶ　黄褐色砂層

Ⅰ　黒色有機質砂層
Ⅱ　淡茶褐色砂層
Ⅲ　黒褐色砂層
Ⅳ　白色砂層
Ⅴ　暗灰褐色砂層
Ⅵ　淡灰色砂層

第17図　第2貝塚地層

A－2区

第Ⅰ層　表土（黒色有機質砂層）20～30cmの厚さを有する耕作土である。

第Ⅱ層　淡茶褐色砂層で20～30cmの厚さである。

第Ⅲ層　黒褐色砂層で嘉徳Ⅱ式土器を包含し，厚さは10～20cmである。

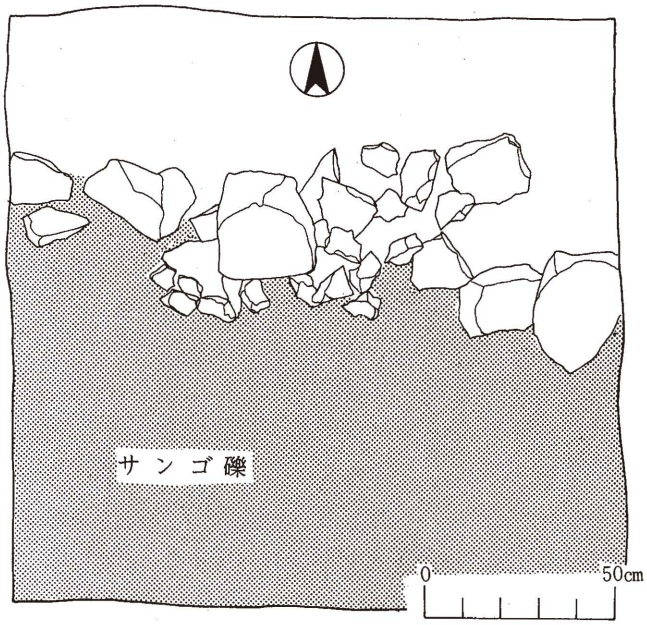
第Ⅳ層　白色砂層で40～60cmの厚さをもち南部へ傾斜している。

第Ⅴ層　暗茶褐色砂層で30cmほど掘り下げると珊瑚礁塊を敷いた集石遺構が検出された。嘉徳Ⅰ式土器を包含している。

第Ⅵ層　淡灰色砂層である。嘉徳Ⅰ式土器が出土した。

A－4区もほとんどA－2区と同様である。A－2区のⅡ，Ⅲ層の間にⅣ層の白色砂層が入りこんでいる。基本的には一緒であるが，砂丘地における砂の移動による若干の違いがみられるだけである。

第2節　遺構



第18図　A－2区住居址

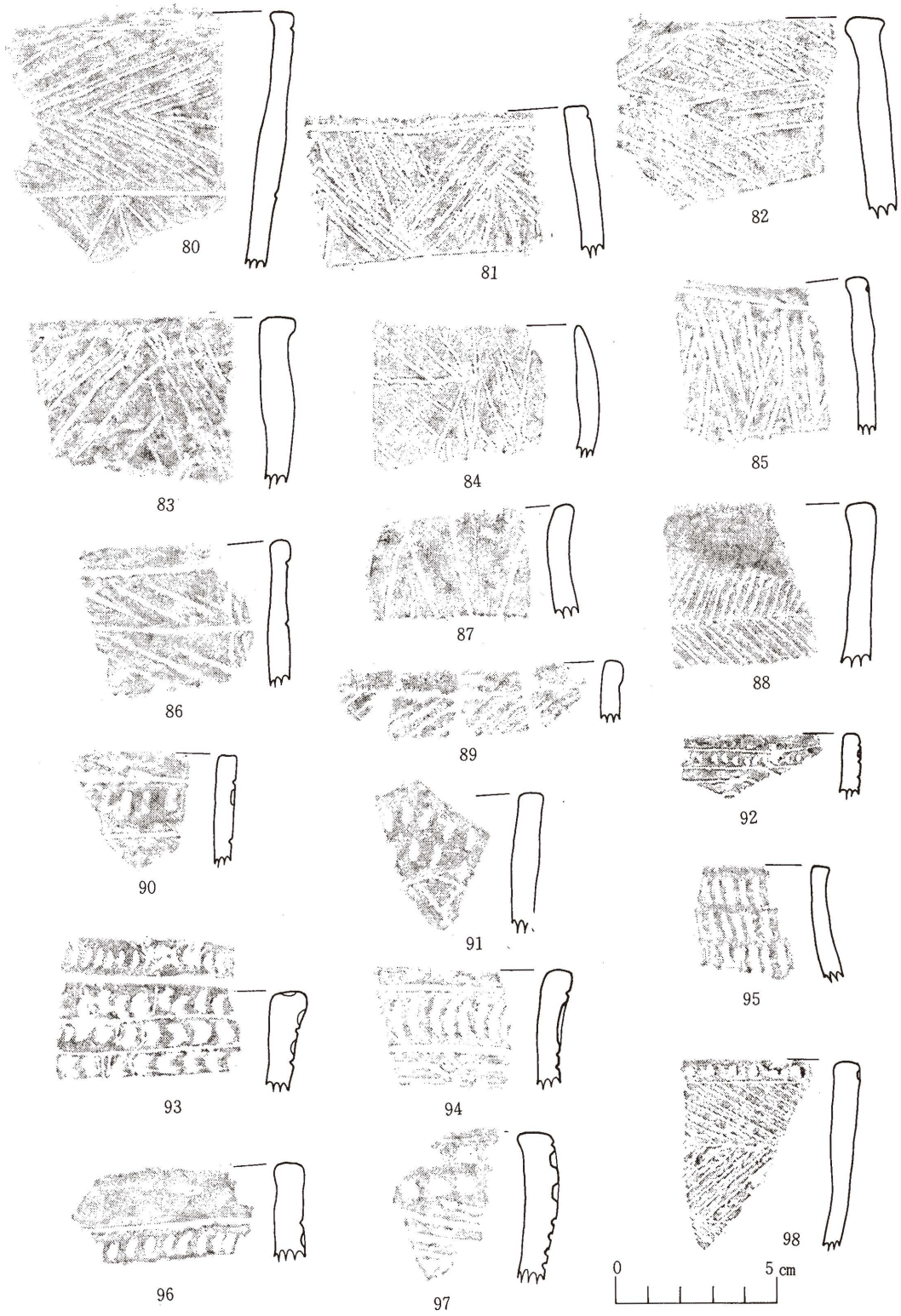
第18図の遺構がA－2区，Ⅴ層中に検出された。嘉徳Ⅰ式土器を共伴する遺構であり，Ⅴ層（暗灰褐色砂層）をⅥ層（淡灰色砂層）に掘り込み，礫が検出された。

礫の形状は拳大から小頭大のものがもっとも多く，礫の集石縁辺部には大きな珊瑚礁塊が列石のような状態で検出された。以前発掘調査された宇宿貝塚，住吉貝塚の住居址に類似する。

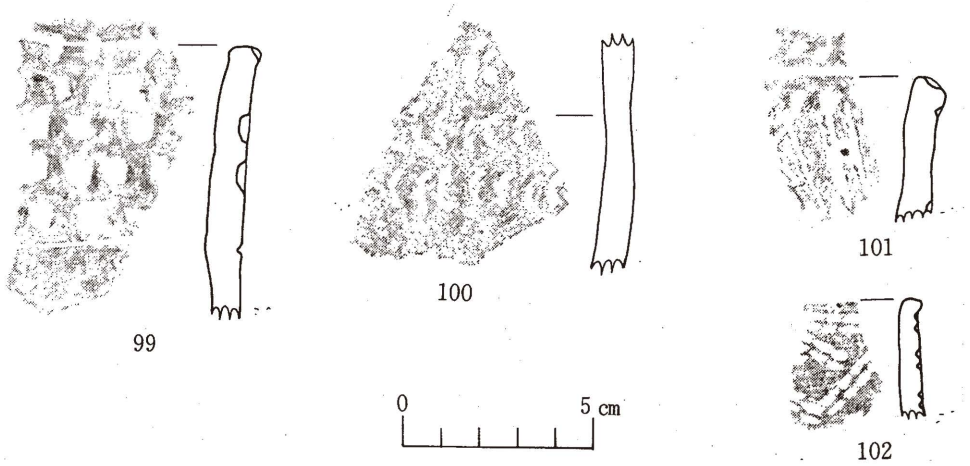
住居址の確認調査が必要であったが，調査期間の問題，また住居址の全体把握及び周辺との遺構確認となると砂地の調査ということも考えあわせ広い面積での拡張が必要であり，後日面縄貝塚の確認調査の計画があり，ここでは確認にとどめ，詳細は後日の調査をまちたい。

第3節　遺物

第2貝塚出土は，自然貝の出土はあったが，石器，貝製品はなく，土器を分類選択して，特徴的なものをとりあげ掲載し，個々の土器は表3にまとめた。



第19図　第２貝塚出土土器(1)



第20図　第２貝塚出土土器(2)

80～89は，Ａ－２区Ⅲ層，Ａ－４区Ⅳ層出土の竹篦様な施文具を用い，沈線文様を描写した土器である。**80．85**は波状口縁である。嘉徳Ⅱ式土器に分類されるものであるが，編み目状が具象的に表現されたものから形式化したものであり，口唇部に刻点のあるもの，口縁部近くに凸帯をめぐらしたものは出土しなかった。

89は，口縁に不規則な肥厚がみられ，面縄西洞式土器への移行形態とも考えられる。

90～96は，爪形文と沈線とを組み合せたもので，嘉徳Ⅰ式土器である。国分直一氏の分類では第三類と表現されているものである。**91**は，山形隆起のあるもので，**93**は口唇部に竹管による爪形文が施こされ，爪形による押し引きに篦描きの沈刻線で囲ったものである。

97は，幅５㎜で先端の平担な篦で押し引きして施文したものである。篦の先端の細かな刻目が凹線文の中に筋状に印されている。**99**も同様と思われる。**100**は淡赤褐色の石英砂を含む土器で竹管を押圧して文様を構成している。 **101**は,口唇部に刺突してある嘉徳Ⅱ式土器であり，**102**は，国分氏が第四類（突刺沈線文土器）と分けられたものである。

＜参考文献＞

河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第９号　1974
九学会連合『奄美その自然と文化』　1959

表３．第２貝塚出土土器分類表

挿図	出土地点	調　整	色　調	焼　成	胎　土	備　考	
80	Ａ－４－Ⅳ	外縦ハケナデ	褐色・赤褐色	良　好		嘉徳Ⅱ式	波状口縁
81	Ａ－４－Ⅳ	内縦ハケナデ	赤 褐 色	良　好	雲母，石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
82	Ａ－４－Ⅳ	ナ　デ	赤 褐 色	良　好	雲母，石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
83	Ａ－４－Ⅳ	ナ　デ	暗 褐 色	良　好	雲母，石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁

84	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良　好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
85	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良　好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	波状口縁
86	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良　好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
87	A－4－Ⅳ	ナ　デ	淡赤褐色	良　好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
88	A－4－Ⅳ	ナ　デ	赤褐色	良　好		嘉徳Ⅱ式	口　縁
89	A－2－Ⅲ	ナ　デ	暗褐色	良　好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
90	A－4－Ⅵ	ナ　デ	暗褐色	良　好		嘉徳Ⅰ	口　縁
91	A－4－Ⅵ	ナ　デ	赤褐色	良　好		嘉徳Ⅰ	口　縁
92	A－4－Ⅵ	ナ　デ	赤褐色	良　好		嘉徳Ⅰ	口　縁
93	A－4－Ⅵ	ナ　デ	赤褐色	良　好	石英を含む	嘉徳Ⅰ	口縁口唇部爪形
94	A－2－Ⅴ	ナ　デ	赤褐色	良　好		嘉徳Ⅰ	口　縁
95	A－2－Ⅴ	ナ　デ	赤褐色	良　好		嘉徳Ⅰ	口　縁
96	A－2－Ⅴ	ハケナデ	赤褐色	良　好		嘉徳Ⅰ	口　縁
97	A－2－Ⅴ	ナ　デ	暗褐色	良　好	石英を含む	嘉徳Ⅰ	口　縁
98	A－2－Ⅴ	ナ　デ		良　好	〃	嘉徳Ⅰ	口　縁
99	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗赤褐色	良　好	雲母·石英·砂を含む		口　縁
100	A－4－Ⅳ	ナ　デ	淡赤褐色	良　好	石英・砂を含む		
101	A－6－Ⅰ	ナ　デ	暗褐色	良　好	金雲母・微砂を含む		口　縁
102	A－4－Ⅳ	ナ　デ	赤褐色	良　好	微砂を含む		口　縁

第５章　まとめ

発掘調査の結果，面縄貝塚は滅失どころか遺跡の範囲拡大と，縄文時代早期から歴史時代までの複合遺跡であることが判明した。地点ごとに若干まとめておきたい。

第１貝塚

第１貝塚は，貝塚，洞穴，開地の複合遺跡である。今回は確認調査であり，基本的に２ｍのトレンチ調査を行ったのであるが多くの成果があった。

貝塚は隆起石灰岩のテラス部にあり，兼久式土器を包含するものである。貝殻は別掲に紹介したがウニ，リュウキュウヒバリガイを主とし，47種類を確認出来た。今回は種を分類しただけであったが詳細に分折していけば食性，生息状況等も推定できるのではなかろうか。貝層中の遺物は，兼久式土器が主であるが弥生後期の土器片がみられ，またＡ－０区の下層部においては開元通宝が３点検出された。Ａ－０区の場合，貝層の約80㎝の堆積に変化がみられず二次的堆積の可能性もあるが，カーボン測定の結果1355±60B.P.Y①という結果があり年輪年代に換算するとA.D.650年という結果が検出されている。このため，兼久式土器の編年は一概に結論を出すのはむずかしいが弥生後期から７世紀の間で，まだ詳細に分折すれば，土器の分類が行われるのではなかろうか。

洞穴遺跡では，箱式石棺墓が検出され，完全人骨の埋葬形態が判明したのであったが，砂層の分類と石棺内での遺物が出土しないため時期的なものが判明しなかったが供献土器から弥生時代前期から中期と推定したのであるが，今後の調査によってより完全なものにしたい。

Ｃ，Ｄ区は，堆積層が厚く岩盤まで調査することは出来なかったが，６層下部より指頭圧痕の爪形文土器が二点出土した。これは沖縄県渡具知東原遺跡②，沖永良部島中甫洞穴③出土の土器と共通するものである。また５層出土の市来式土器は発掘においては徳之島で初めてのものであり多くの貝製品と供に今からの課題の一つであろう。

第２貝塚

第２貝塚は，嘉徳Ⅱ式と嘉徳Ⅰ式土器が間層を隔てて出土し，嘉徳Ⅰ式の包含する層位でサンゴ塊を敷いた住居址と思われるものが検出された。今回は確認にとどめたが，広範囲の拡張と砂層調査ということが今回は遺構検出をみあわせ，後日の調査にまちたい。

以上簡単ではあるが面縄貝塚の問題点をあわせ成果を列記したが，面縄貝塚は以後も継続して調査の計画があり逐次報告していきたいと思う。

① 京都産業大学　山田治氏測定

② 読谷村教育委員会　「渡具知東原第１～２次発掘調査報告」　1977

③ 河口貞徳他　「中浦洞穴」　考古学ジャーナル　214,1983

第6章　自　然　貝

植之原道義

全般的に色彩が抜け，それによる特徴が薄れたもの，破片等，種名まで同定するには無理なものもあった。中には逆に驚くほどの色彩を保っていたものもあった。……貝塚の貝殻にはよくみられる。

当時の住人が貝を利用する目的は，食用，容器，道具，装飾用具と推察される。食用の場合肉が食用にたえて，しかもたやすく大量に採ることのできるものであろう。それには一般に二枚貝がむいている。そして内海の砂浜が適地である。ところが徳之島にはそのようなところは少ない。喜念の浜ぐらいである。

採集されたもので砂浜に生息するものは，ウズラガイ，トミガイ，ニシキノキバフデガイ，イソハマグリ，リュウキュウマスオガイのものぐらいで，他は（陸貝除）岩礁性のものである。食用貝としてはもっと多くの種が考えられる。食用以外の用途については，大型，殻が堅い，美しいもので限られた種類である。

大量の貝殻が出土するわけであろうが，それ等をつぶさに調査すれば，当時の食性，貝の生息状況，あるいは海岸の景観の推察ができるかもしれない。

軟体動物門

腹足綱

ツタノハガイ科

ツタノハガイ，オオツタノハガイ，オオベッコウカサガイ

ニシキウズガイ科

ギンタカハマガイ，サラサバティ

リュウテンサザエ科

チュウセンサザエ，ヤコウガイ

アマオブネガイ科

アマオブネガイ，イシマキガイ（淡水産），イシダタミアマオブネガイ

ヤマタニシ科

ヤマタニシ（オオシマヤマタニシ？）

オニノツノガイ科

オニノツノガイ

スイショウガイ科

ムカシタモトガイ，クモガイ，ラクダガイ，スイジガイ

タマガイ科

タマガイ

タカラガイ科
ハナビラタカラガイ，ホシキヌタガイ，ヤクシマタカラガイ，ムラクモタカラガイ
オキニシ科
オキニシ，オオナルトボラ
ヤツシロガイ科
ウズラガイ
アクキガイ科
ツノレイシガイ，キイロイガレイシガイ
フデガイ科
ニシキノキバフデガイ
イモガイ科
ニシキミナシガイ，サヤガタイモガイ？，タガヤサンミナシガイ，クロフモドキガイ
ナンバンマイマイ科
オオシママイマイ（陸性）
斧足綱（二枚貝類）
フネガイ科
エガイ，ベニエガイ
タマキガイ科
ウチワガイ
イガイ科
リュウキュウヒバリガイ，シュモクアオリガイ，シロアオリガイ
ウミギクガイ科
メンガイ類，ウミギクガイ類
シャコガイ科
ヒメシャコガイ
チドリマスオガイ科
イソハマグリ，リュウキュウバカガイ
リュウキュウマスオガイ科
リュウキュウマスオガイ
節足動物門
顎脚綱
フジツボ類
棘皮動物門
ウニ綱
ウニ類，パイプウニ

第７章　面縄貝塚出土の動物骨について

鹿児島大学農学部　　西中川　　駿

１．はじめに

面縄貝塚は，鹿児島県大島郡伊仙町にあり，昭和３年に発見され，四ヵ所の貝塚からなる縄文，弥生時代の貴重な遺跡である。今回は，遺跡保存のために，第一，二貝塚の再調査が行われ，出土した自然遺物を調査する機会を得た。ここでは，とくに哺乳類の出土骨を中心に報告する。なお，動物種名や学名は，今泉[2)]に従った。また，魚類の分類は，別項を参照されたい。

２．面縄第一貝塚出土の動物種と出土量

第一貝塚出土の自然遺物は，総重量1170.2ｇ（貝類を除く）で，その動物別および区画別出土量は，表１に示した。哺乳類が全体の57％を占め，魚類31％，その他が12％である。その他の中には，鳥類やカメ，カエル，カニ類がみられる。陸棲哺乳類は以下に記す３目４種である。

Ａ．偶蹄目（*Artiodactyla*）

１）イノシシ（*Sus scrofa* LINNAEUS）

２）ウシ（*Bos taurus* LINNAEUS）

Ｂ．食肉目（*Carnivora*）

３）イヌ（*Canis familiaris* LINNAEUS）

Ｃ．齧歯目（*Rodentia*）

４）ネズミ類（*Muridae gen. et sp. sp. indent*）

これらのうち，イノシシが605.2ｇ（112骨片）で，全体の91％を占めている。なお，動物種や骨の種類を同定出来ないものが90.5ｇあり，哺乳類総重量からみた鑑定率は，88％である。以下各動物について述べる。

１）イノシシ（Pl. Ⅰの１～28参照）

イノシシのものと同定された骨片は，112個で，区画ではＡ－１，Ａ－３の３貝層や３層に多くみられ（表１），骨別（表２）では歯（左14，右15），下顎骨（12，４）が多く，四肢骨では，上腕骨（３，４），大腿骨（３，５）が多い。歯や下顎骨の数からみた推定個体数は５体である。一方，ほぼ完全な右第三中足骨長（最大長72㎜）からイノシシの大きさを推定すると現生のリュウキュウイノシシよりも大きく，ニホンイノシシより小さい型のものである。上腕骨，大腿骨などのような長骨は１～２カ所で割断されている。

２）ウシ（Pl. Ⅱの１参照）

ウシはＡ－１表層からただ１個の右中手骨の出土であるが，表層からの出土であり，これが弥生時代のものであるという確証はない。骨端のとれた遠位部のみであるが，現代和牛と比較すると小さいことから，改良以前の牛であることが推測される。

3）イヌ（Pl. Ⅱの2～4参照）

イヌは胸椎1，上腕骨（右）1，脛骨（左）1，計3個の出土であるが，出土地点がA－0，A－3，C－1と異なることから，それぞれ別の個体であると思われる。ほぼ完全な右上腕骨の最大長は，12.1cmであり，山内[10]の方法で体高を推定すると約39cmとなり，長谷部ら[1,9]のいう小型犬に属する。

4）ネズミ類（Pl. Ⅱの5～9参照）

ネズミの骨は，大腿骨（左，右），上腕骨（右）など5個の出土であり，骨が大型であることから，おそらくドブネズミかケナガネズミ大のものであろう。また，A－1の3貝層からまとまって出土していることから，同一個体のものと思われる。

以上，3目4種の陸棲哺乳類の出土骨について述べたが，骨格別にみると（表2），頭蓋39.7％，前肢骨24.8％，後肢骨24％，胴骨11.5％であり，歯の出土が多い。

なお，海棲哺乳類としてクジラの小骨片もみられ，鳥類はキジバト類の左中足骨1個がみられる。その他，カメ類の甲や指骨など12個，カエルの上腕骨や寛骨，カニ類の鉗脚（22個）などがみられる。

3．面縄第二貝塚出土の動物種と出土量

面縄第二貝塚出土の自然遺物は，総重量252.1g（貝類を除く）で，それらはイノシシ172.7g，クジラ類6.5g，魚類20g，カメ類14.9gである。A－2，A－4区からの出土が多い。細骨片のため同定不能のものが38gあり，総重量からみた鑑定率は84.9％である。陸棲の哺乳類は，イノシシのみで，その骨別出土骨片数は表2に示した。

A．偶蹄目（*Artiodactyla*）

1）イノシシ（*Sus scrofa* LINNAEUS，Pl. Ⅱの21～28参照）

イノシシの骨と同定されたものは，26骨片で，肋骨や尺骨などが多くみられ，推定個体数3個体と思われる。寛骨や距骨などは現生のリュウキュウイノシシより大きく，ニホンイノシシの雌程度の大きさである。長骨は第一貝塚のものと同様に割断されており，骨髄食が伺われる。

4．考　察

イノシシの出土は，鹿児島県下の共通した現象であるが，シカの出土のないことは，この奄美地方の特徴のようである。笠利町のサウチ遺跡[5]や宇宿貝塚[6]などからもシカの出土は報告されていない。今回の面縄貝塚でも同様にイノシシ中心の狩猟がなされていたことが想像され，当時，この地方にはシカは生息していなかったことがうかがわれる。

イヌの出土は，珍らしく，県下でも黒川，片野洞穴や高橋貝塚などのみからである。[7,8]今回出土した上腕骨から体高を推定すると，約39cmであり，現在のサツマビーグル犬大の大きさである。イヌは当時，狩猟犬として飼われていたと云われており，[3,4]面縄貝塚人もイヌを狩猟犬として飼っていたことが想像される。ウシの出土がみられるが，当時のものであるとは思われ

ない。しかし，現代和牛より小さいことから，改良以前の在来牛であることが推察される。ネズミ類は，当時の人々が食料として利用したものでなく，おそらく貝塚に入って死亡したものと思われる。この他にクジラ，カメなどの骨もみられたが，これも古代人の重要な蛋白資源であったのだろう。また，カニが多く出土しているが，面縄川の流域に生息していたものを食料として利用したのであろう。

一方，出土したイノシシの骨を現生のリュウキュウイノシシと比較すると，形態的には類似しているが，やや大型のものが生息していたことがうかがわれる。また，イノシシの長骨や頭蓋は，割断されているが，これは金子ら[3,4]が云うように骨髄や脳を摘出して食べていたことがうかがわれる。また，イノシシの出土骨が多いことから，この面縄貝塚を遺した人々は，イノシシを中心とした狩猟を行っていたことが示唆される。

5．まとめ

面縄第一，二貝塚より出土した動物骨について，動物種や骨の種類について同定した。

1．面縄第一貝塚出土の自然遺物は，総重量1170.2ｇ（貝類を除く）で，哺乳類668.1ｇ，鳥類0.2ｇ，魚類361.0ｇその他31.4ｇで，それらは，イノシシ，ウシ，イヌ，ネズミ，クジラ，キジバト，カメ，カエルおよび魚類（別項参照）であった。

2．面縄第二貝塚出土の自然遺物は，総重量257.1ｇで，イノシシ，クジラ．カメおよび魚類（別項参照）であった。

参考文献

1） 長谷部言人：日本石器時代家犬について，人類学雑誌40巻１号（1925）

2） 今泉　吉典：原色日本哺乳類図鑑，Ｐ１－196，保育社，東京（1979）

3） 金子　浩昌：動物遺存体，考古学ゼミナール，江上波夫監修，Ｐ340－345，山川出版社，東京（1976）

4） 金子　浩昌：縄文時代の狩猟，漁撈，歴史公論２，67－71（1979）

5） 笠利町教育委員会：サウチ遺跡，65－65（1978）

6） 笠利町教育委員会：宇宿貝塚，笠利町文化財調査報告書，95－96（1979）

7） 西中川　駿　他４名：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅱ．鹿児島県片野洞穴出土骨の概要，鹿大農学術報告，32，157－166（1982）

8） 西中川　駿　他３名：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅳ．鹿児島県黒川洞穴出土骨の概要，鹿大農学術報告，33，147－157（1983）

9） 芸田　清吾：日本古代家畜史の研究，Ｐ１～338，学術出版会，東京（1969）

10） 山内　忠平：犬における骨長より体高の推定法，鹿大農学術報告，7,125～131，(1958)

表１　面縄第一貝塚出土の動物別および区画別出土骨量

（g）

区画・層		哺乳類 イノシシ	哺乳類 ウシ	哺乳類 イヌ	哺乳類 ネズミ	哺乳類 クジラ	鳥類	魚類	カメ類	カエル類	カニ類	不明骨	区画別出土骨量
A－0	2貝層	4.2 (1)		2.4 (1)								3.0	9.6
A－1	表層	16.4 (5)	7.3 (1)									1.4	25.1
	3貝層	111.1 (39)			1.2 (5)		0.2 (1)	289.0	13.2 (7)	0.5 (2)	21.1	56.4	492.7
	3層下	86.7 (8)											86.7
	61・314 360	44.1 (3)											44.1
A－3	3層	76.6 (19)						31.0				26.5	134.1
	3層下	167.4 (24)		2.4 (1)								2.6	172.4
	22・361	19.5 (2)											19.5
A－4	表層								3.1 (2)				3.1
A－5	387 388	26.6 (5)										0.6	27.2
C－1	混土貝層	37.0 (4)		16.6 (1)		12.5 (2)		41.0	12.5				119.6
D－1	139	15.6 (2)				20.5 (2)							36.1
動物別出土骨量		605.2 (112)	7.3 (1)	21.4 (3)	1.2 (5)	33.0 (4)	0.2 (1)	361.0	28.8	0.5	21.1	90.5	1170.2
推定個体数		5	1	3	1	—	1	—	—	1	—	—	—

（　）は骨片数を示す。

表 2　面縄第一，第二貝塚出土の陸棲哺乳動物の骨別出土骨片数

	骨名 / 動物種		頭蓋					胴骨							前肢骨								後肢骨							動物別出土骨片数
			頭蓋骨	下顎骨	舌骨	歯	角	頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肋骨	胸骨	鎖骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨	寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨	
第一貝塚	イノシシ	左	2	12		14							4			4	3	2	1		1		3	3		1		2	1		112
		右		4		15		4	1	1			2				4	3	2		3	4	2	5		1			3	5	
	ウシ	左																													1
		右																			1										
	イヌ	左																								1					3
		右							1								1														
	ネズミ	左				1																		1		1					5
		右															1							1							
	骨別骨片数		2	16		30		4	2	1			6			4	9	5	3		5	4	5	10		4		2	4	5	121
	骨格別出土率		39.7% (48)					11.5% (14)							24.8% (30)								24.0% (29)								
第二貝塚	イノシシ	左	2	1		1							3			1	2	1	3												26
		右				1			1				2			1			1		1		1			2		1	1		
	骨格別出土率		19.2% (5)					23.1% (6)							38.5% (10)								19.2% (5)								
総出率			36.1% (53)					13.6% (20)							27.2% (40)								23.1% (34)								147

(　) 骨片数

写真説明

Plate Ⅰ　1～28　イノシシ（面縄第一貝塚）

1．上顎骨（左，第一後臼歯を含む）　2．犬歯（右，上顎）　3．犬歯（左，下顎）　4．犬歯（左，下顎）　5．第三後臼歯（右，下顎）　6．第三後臼歯（右，下顎）　7．第三後臼歯（右，下顎）　8．下顎骨（左，犬歯を含む）　9．下顎骨（切歯を含む）　10．下顎骨（左，歯槽のみ）　11．環椎　12．肋骨（左，第一）　13．肩甲骨（左）　14．上腕骨（右，前面）　15．上腕骨（左，後面）　16．橈骨（右，前面）　17．橈骨（左，後面）　18．尺骨（右，側面）　19．寛骨（右）　20．大腿骨（右，側面）　21．大腿骨（右，側面）　22．脛骨（右，前面）　23．踵骨（左，内側面）　24．第四足根骨（左）　25．第三中手骨（右）　26．第三指基節骨（右）　27．第四指中節骨（右）　28．第三趾末節骨（右）

Plate Ⅱ　1　ウシ　11～15　カメ
2～4　イヌ　16～17　カエル
5～9　ネズミ　18～20　カニ
10　キジバト　（以上面縄第一貝塚）
21～28　イノシシ　（面縄第二貝塚）

1．中手骨（右，前面）　2．胸椎　3．脛骨（左）　4．上腕骨（右，前面）　5．切歯（左，下顎）　6．上腕骨（右）　7．大腿骨（左）　8．大腿骨（右）　9．脛骨（右）　10．中足骨（左）　11．頭蓋　12．腹甲　13～15．指骨　16．上腕骨（左）　17．寛骨（左）　18～20．鉗脚　21．上顎骨（左，前，後臼歯を含む）　22．肋骨（左）　23．尺骨（左）　24．尺骨（右）　25．寛骨（右）　26．脛骨（右，前面）　27．距骨（右，前面）　28．第三中手骨（右，前面）

Plate I

Plate II

第8章　鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨

松下　孝幸※・石田　肇※※

はじめに

鹿児島県大島郡伊仙町（徳之島）にある面縄第1貝塚の1982年の調査によって，第1洞穴から散乱骨と1体の埋葬人骨とが出土した。この埋葬人骨は別項で述べられているように，考古学的所見より，弥生時代（前期～中期）に属する人骨である。人骨の保存状態はきわめて良好なもので，また徳之島から弥生時代人骨が出土したのは今回が初めてであり，薩南諸島の形質人類学の研究資料としてはきわめて貴重なものと考えられるので，計測ならびに形質人類学的観察を行なった。その結果を報告したい。

資　料

第1洞から出土した埋葬人骨は1体で，埋葬姿勢は仰臥伸展葬であった。この人骨の性別・年令は，下記の所見より，女性・壮年と推定される。

計測方法はMartin-Saller (1957) によったが，一部はHowells (1973) の方法で計測を行なった。また鼻根部については鈴木（1963）の方法と松下（1983）の方法で計測を行なった。

比較資料としては，奄美大島の宇宿貝塚出土の弥生人（以下，宇宿弥生人），（松下，1979），西北九州弥生人（内藤，1971），大友弥生人（松下，1981），土井ケ浜弥生人（金関，他，1960，財津，1956）を用いた。

なお，1982年に第1洞から出土した埋葬人骨を「1号人骨」と番号をつけ，今回はこの人骨についてのみ報告する。

所　見

各骨の計測値は表11～20に示すとおりである。

(1) 頭　蓋

1．脳頭蓋

脳頭蓋はほぼ完全である。外後頭隆起の発達は悪く，乳様突起もあまり大きいものではない。縫合は，三主縫合とも内外両板は開離している。

※MATSUSHITA　Takayuki　　長崎大学医学部解剖学第二教室
※※ISHIDA　hajime　　〃

脳頭蓋の主要計測値は，頭蓋最大長が165mm，頭蓋最大幅は136mm，バジオン・ブレグマ高は130mmで，頭蓋長幅示数は82.42，頭蓋長高示数は78.79，頭蓋幅高示数は95.59となり，頭型としては，brach-，hypsi-，metriokran（短・高・中頭）に属している。

頭蓋水平周は486mm，横弧長は304mm，正中矢状弧長は352mmである。

次いで，脳頭蓋の主要計測値について，宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人および土井ケ浜弥生人と比較してみると（表１），頭蓋最大長および頭蓋最大幅はどの比較群よりも小さく，バジオン・ブレグマ高は西北九州弥生人，大友弥生人および土井ケ浜弥生人よりもわずかに大きく，宇宿弥生人の計測値に一致する。頭蓋長幅示数は宇宿弥生人よりは小さいが，西北九州弥生人，大友弥生人および土井ケ浜弥生人よりも小さい。宇宿弥生人は過短頭であり，本例も短頭であるが，宇宿弥生人ほどその短頭性は強いものではない。またバジオン・ブレグマ高がやや大きいため，頭蓋長高示数および頭蓋幅高示数はどの比較資料よりも大きい。

頭蓋水平周および正中矢状弧長はどの比較群よりも小さいが，横弧長は宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人よりも大きく，土井ケ浜弥生人と大差ない。

表１　脳頭蓋計測値（女性）　（mm）

		面縄第１貝塚１号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（金関，地）	
			n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	165	1	170	15	178.07	18	178.11	32	176.0
8.	頭蓋最大幅	136	1	149	15	139.27	17	141.18	32	138.1
17.	バジオン・ブレグマ高	130	1	130	7	128.28	13	128.31	29	128.1
8／1	頭蓋長幅示数	82.42	1	87.65	15	78.23	13	80.30	30	78.5
17／1	頭蓋長高示数	78.79	1	76.47	7	71.22	13	72.92	28	72.8
17／8	頭蓋幅高示数	95.59	1	87.25	7	92.48	13	91.39	29	92.8
23.	頭蓋水平周	486	1	506	14	502.14	18	515.44	27	506.0
24.	横弧長	304	1	317	11	309.09	18	306.00	31	305.1
25.	正中矢状弧長	352	1	368	13	363.08	10	362.90	29	361.2

２．顔面頭蓋

左側の鼻骨と左側の頬骨弓を欠失している以外はほぼ完全である。

眉上弓の隆起は著しく弱く，前頭部は豊かに膨隆している。また鼻骨の隆起は弱く，鼻根部は広くて扁平である。

主要計測値は，中顔幅が98mm，顔高は96mm，上顔高は61mmで，顔面の諸径は小さく，特に高径は著しく低い。頬骨弓幅は計測できないが，復元してその推定値を求めてみると，（134mm）となり，顔面の高径のわりには幅径は大きいようである。ウィルヒョーの顔示数および上顔示数はそれぞれ97.96，62.24で，両示数値とも小さく，低・広顔の傾向が強い。

眼窩幅は42mm（右），41mm（左），眼窩高は30mm（右），33mm（左）で，眼窩示数は71.43（右），80.49（左）となり，右側はchamaekonch（低眼窩）に，左側はmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は29mm，鼻高は47mmで，鼻示数は61.70となり，hyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は表２に示すとおり，前眼窩間幅は18mm，前頭突起水平傾斜角は102度で，鼻根角は143度，鼻根陥凹示数は13.64となり，前頭突起水平傾斜角，鼻根角は大きく，鼻根陥凹示数は小さく，鼻根部は比較的扁平である。

表２　鼻根部計測値　（mm，度）

前眼窩間幅	18
鼻根横弧長	—
鼻根彎曲示数	—
鼻骨最小幅	—
前頭突起上幅（右）	9
（左）	10
前頭突起水平傾斜角	102
グラベラ・ナジオン投影距離	2
鼻根角	143
鼻根陥凹示数	13.64

また側面角は，全側面角は76度，鼻側面角は76度，歯槽側面角は77度で，弱い歯槽性突顎の傾向が認められる。

次いで，脳頭蓋の場合と同様に，他資料との比較を行なってみると（表３），中顔幅は西北九州弥生人，大友弥生人よりも大きく，宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人と大差ない。顔高はどの比較群よりも小さく，上顔高は土井ケ浜弥生人よりも著しく小さく，宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人と大差ない。ウイヒョーの顔示数および上顔示数はどの比較資料よりも小さいが，その中でも土井ケ浜弥生人との差は著しく大きく，比較的宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人に近いが，本例はこれらよりも一層低・広顔の傾向が強い。

眼窩幅は宇宿弥生人，大友弥生人よりわずかに小さく，西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人と大差なく，眼窩高は西北九州弥生人より大きく，他の３群の平均に一致する。従って眼示数は宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人より大きく，土井ケ浜弥生人より小さい。

鼻幅はどの比較資料よりも大きく，鼻高は宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，西北九州弥生人，大友弥生人と大差ない。本例の鼻示数は著しく大きく，どの比較群よりも大きく，低鼻の傾向が著しい。

また歯槽側面角は宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人よりも大きく，歯槽性突顎はこれらの人骨よりは弱い。

表３　顔面頭蓋計測値（女性）　（mm，度）

		前縁第１貝塚１号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（金関，地）	
			n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔長	100	1	93		—	5	97.60	23	94.6
45.	頬骨弓幅	—	1	135	6	130.17	1	125	20	131.9
46.	中顔幅	98	1	99	11	95.91	10	94.90	23	98.5
47.	顔高	96	1	112	9	104.89	5	110.60	23	114.2
48.	上顔高	61	1	63	12	60.92	6	62.17	22	68.3
47／45	顔示数（K）	—	1	82.96	6	81.70		—	17	86.6
48／45	上顔示数（K）	—	1	46.67	6	47.64		—	17	51.8
47／46	顔示数（V）	97.96	1	113.13	9	109.50	4	111.82	21	115.9
48／46	上顔示数（V）	62.24	1	63.64	11	63.49	5	64.88	21	69.3
51.	眼窩幅（左）	41	1	43	10	41.10	9	42.67	24	40.3
52.	眼窩高（左）	33	1	33	10	31.20	10	33.30	25	33.3
52／51	眼窩示数（左）	80.49	1	76.74	10	75.92	8	77.60	24	82.6
54.	鼻幅	29	1	26	12	26.58	11	26.73	20	26.0
55.	鼻高	47	1	50	12	46.33	10	46.80	23	49.0
54／55	鼻示数	61.70	1	52.00	12	57.39	9	58.82	20	53.0
74.	歯槽側面角	77	1	69		—		—	22	70.5

3．下顎骨

下顎骨は完全である。径は小さく，筋付着部の発達はあまり良いものではない。筋突起はやや大きく，下顎切痕は浅い。また角前切痕は認められない。

4．歯

上顎骨歯槽突起および下顎骨歯槽部には歯が釘植していた。歯槽の状態と残存歯を歯式で表わすと次のとおりである。

⊗⊗⊗⊗ P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C ⊗⊗／／／
⊗⊗⊗ P_2 P_1 C ⊗⊗	⊗⊗⊗ P_1 ⊗⊗⊗⊗

（／：不明（破損）
○：歯槽開存
⊗：歯槽閉鎖）

咬耗度はBrocaの3度で，$\overline{P}_1$，$\underline{I}_1$を除くすべての残存歯に齲蝕が認められる。また風習的抜歯は跡は認められない。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1．鎖　骨

右側は完全に残存していたが，左側は肩峰端を欠いていた。長さはやや長く，骨体の径はあまり大きいものではない。

2．上腕骨

左右ともほぼ完全である。長さも骨体の大きさも中程度で，三角筋粗面の発達は良くないが，右側の大結節稜の発達は好良である。また両側に滑車上孔が認められる。

計測値は，最大長が271mm（右），268mm（左），骨体最小周は57mm（右），53mm（左），中央周は63mm（右），59mm（左）で，長厚示数は21.03（右），19.78（左）である。中央最大径は21mm（右），19mm（左），中央最小径は16mm（右，左）で，骨体断面示数は76.19（右），84.21（左）となり，扁平性はあまり強いものではない。

次いで，他資料と比較してみると（表4），最大長は土井ケ浜弥生人よりも著しく小さいが，宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人の平均値と大差ない。骨体最小周は土井ケ浜弥生人よりわずかに小さいが，宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人と大差なく，中央周についても宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人に近い。長厚示数は宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人，土井ケ浜弥生人に近いが，その中でも大友弥生人の平均値にきわめて近い。また中央最大径は宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人，土井ケ浜弥生人と大差なく，中央最小径は比較群と大きな差はない。骨体断面示数は宇宿弥生人よりは小さいが，大友

弥生人よりも大きく，比較的土井ケ浜弥生人に近い。すなわち，本例は宇宿弥生人よりも長く，また骨体の諸径も大きく，比較的大友弥生人に近い。

表4　上腕骨計測値（女性，右）　(mm)

		面縄第1貝塚 1号人骨	宇宿貝塚 弥生人 (松下)		大友 弥生人 (松下)		土井ケ浜 弥生人 (財津)	
			n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	271	1	263	5	270.20	18	285.3
2.	上腕骨全長	266	1	259	5	265.40	18	281.9
5.	中央最大径	21	1	18	25	21.68	28	20.6
6.	中央最小径	16	1	15	25	15.48	29	15.5
7.	骨体最小周	57	1	50	20	57.65	30	59.1
7(a).	中央周	63	1	54	23	61.96		—
6／5	骨体断面示数	76.19	1	83.33	25	71.53	29	75.9
7／1	長厚示数	21.03	1	19.01	5	21.18	17	20.4

3．橈骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや長く，骨体の諸径は中程度である。

4．尺骨

左右とも遠位端を欠いている以外はほぼ完全である。長さはやや長く，骨体はやや細いが，骨間縁は中央部では良く発達している。

2) 下肢骨

1．寛骨

左右とも恥骨の一部と腸骨粗面部を欠いている以外は良く残存していた。大坐骨切痕の角度は大きく，恥骨下角も大きい。また恥骨結合面には弱い平行隆線が認められる。

2．大腿骨

左右とも内側顆の一部と大腿骨頭の一部を欠いている以外はほぼ完全に残存していた。長径は短かく，骨体は細い。粗線の発達は著しく悪く，骨体は丸くなっており，その断面形は円に近いが，骨体上部は扁平である。

計測値は，最大長が372mm（右），377mm（左），骨体中央周は73mm（右，左）で，長厚示数は19.73（右），19.52（左）と小さく，ややきゃしゃな傾向がうかがえる。骨体中央矢状径は23mm（右，左），骨体中央横径は23mm（右），22mm（左）で，骨体中央断面示数は100,00（右），104.55（左）である。また上骨体断面示数は75.00（右），77.78（左）となり，骨体上部は扁平である。

次いで，他の資料と比較してみると（表5），最大長は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人と大差ない。中央周も西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人よりわずかに大きい。長厚示数は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人

よりもわずかに小さく，宇宿弥生人と大差ない。骨体中央矢状径および横径はともに西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも大きく，比較的宇宿弥生人に近い。骨体断面示数は宇宿弥生人よりは大きいが，西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さい。上骨体断面示数は西北九州弥生人よりやや小さいが宇宿弥生人よりも大きく，土井ケ浜弥生人と大差ない。すなわち，本例は比較群の中では宇宿弥生人に最も近いようである。

表５　大腿骨計測値（女性，右）　（mm）

		面縄第１貝塚 1号人骨	宇宿貝塚 弥生人（松下）		西北九州 弥生人（松下）		土井ケ浜 弥生人（財津）	
			n	M	n	M	n	M
1.	最大長	372	1	370	5	386.80(左)	14	399.5
2.	自然位全長	370	1	368	4	378.25(左)	14	393.5
6.	骨体中央矢状径	23	1	22	30	26.00	33	25.6
7.	骨体中央横径	23	1	24	30	25.03	33	25.0
8.	骨体中央周	73	1	71	28	80.32	33	79.6
9.	骨体上横径	28	1	28	32	29.06	26	30.4
10.	骨体上矢状径	21	1	20	32	22.75	31	22.8
8／2	長厚示数	19.73	1	19.29	4	20.30(左)	10	20.1
6／7	骨体中央断面示数	100.00	1	91.67	30	104.05	33	102.8
10／9	上骨体断面示数	75.00	1	71.43	32	78.42	31	75.7

3．脛　骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや短かく、骨体もやや細い。ヒラメ筋線の発達は著しく悪いが，右側後面には一稜が認められ，左側には鉛直線が認められる。中央断面型は右側がヘリチカのⅣ型，左側はⅡ型である。

計測値は，最大長が319mm（右），320mm（左），最小周は65mm（右，左）骨体周は68mm（右），70mm（左）で，長厚示数は20.83（右，左）で，示数値はやや小さく，ややきゃしゃな傾向が認められる。中央最大径は24mm（右），25mm（左），中央横径は19mm（右），18mm（左）で，中央断面示数は79.17（右），72.00（左）となり，扁平性は認められない。

次いで，他資料と比較してみると（表６），最大長は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも著しく小さく，宇宿弥生人よりもわずかに大きい。最小周および骨体周はともに西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人よりも大きい。長厚示数は西北九州弥生人よりも小さく，宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人よりもわずかに大きい。中央最大径は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人と大差なく，中央横径は比較資料と大差ない。中央断面示数は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも大きく，宇宿弥生人と大差ない。すなわち脛骨は長さが短かく，骨体も細く，また扁平性は認められないもので，比較的宇宿弥生人に近い。

表6　胫骨計測値（女性，右）　(mm)

		面縄第1貝塚 1号人骨	宇宿貝塚 弥生人 (松下)		大友 弥生人 (松下)		土井ケ浜 弥生人 (財津)	
			n	M	n	M	n	M
1.	胫骨全長	312	1	309	2	311.50	10	327.5
1a.	胫骨最大長	319	1	316	3	323.00	10	332.9
8.	中央最大径	24	1	23	27	27.26	28	26.0
8a.	栄養孔位最大径	28	1	27	25	30.56	26	30.1
9.	中央横径	19	1	18	29	19.48	28	19.0
9a.	栄養孔位横径	20	1	20	25	21.12	27	21.5
10.	骨体周	68	1	65	27	74.74	27	71.8
10a.	栄養孔位周	78	1	73	24	82.13	27	82.2
10b.	最小周	65	1	61	23	68.17	28	67.3
9／8	中央断面示数	79.17	1	78.26	27	71.79	24	71.5
9a/8a	栄養孔位断面示数	71.43	1	74.07	25	69.24	27	73.0
10b／1	長厚示数	20.83	1	19.74	2	21.86	4	19.6

4．腓　骨

左右とも腓骨頭を欠損しているが，その他の部分は完全である。長さは短かく，骨体も細く，稜の発達も悪く，溝状形成も弱い。

3)　四肢骨比

橈骨，上腕骨，大腿骨，胫骨の最大長についてそれぞれの比を計算してみると表7のとおりである。これを他の資料と比較してみると（表8），橈骨と上腕骨との比および胫骨と大腿骨との比は二塚山弥生人よりも大きく，その他の比は宇宿弥生人，大友弥生人，宮の本弥生人と大差ない。すなわち，二塚山弥生人の上腕骨は橈骨に比べるとやや長いが，本例の上腕骨は他の資料と同じように短かいものである。

表7　四肢骨比

	右	左
橈骨／上腕骨	78.23	77.61
橈骨／大腿骨	56.99	55.17
上腕骨／大腿骨	72.85	71.09
胫骨／大腿骨	85.75	84.88

表8　四肢骨比（女性）

	面縄第1貝塚 1号人骨	宇宿貝塚 弥生人 (松下)		大友 弥生人 (松下)		宮の本 弥生人 (松下)		二塚山 弥生人 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
橈骨／上腕骨	78.23	1	77.57	2	78.14	1	80.84	1	74.60
橈骨／大腿骨	56.99	1	55.14	1	56.13		—		—
上腕骨／大腿骨	72.85	1	71.08	2	70.64		—		—
胫骨／大腿骨	85.75	1	85.41	2	83.20(左)		—	1	78.09

(3)　軀幹骨

椎骨，肋骨，仙骨が残存しており，椎骨には変形性脊椎症，楔状椎など病的所見が認められた。

この病理学的所見については別の機会に改めて報告したい。

(4) 推定身長値

大腿骨，脛骨，上腕骨，橈骨のそれぞれ最大長からPearsonおよび藤井の式を用いて推定身長値を算出してみると表9のとおりである。

大腿骨から推定すれば，145.20cm（Rearson，右），146.17cm（Pearson，左），144.37cm（藤井，右），145.68cm（藤井，左）となり，低身長である。

次いで，右大腿骨最大長からPearsonの式を用いて算出した推定値について，他資料と比較してみると(表10)，土井ケ浜弥生人はもとより西北九州弥生人，大友弥生人よりも小さく，宇宿弥生人，宮の本弥生人の推定身長値にきわめて近く，低身長である。

表9　推定身長値　(mm)

		右	左
大腿骨	Pearson	145.20	146.17
	藤　井	144.37	145.68
脛　骨	Pearson	149.80	150.04
	藤　井	148.05	148.63
上腕骨	Pearson	146.11	145.28
	藤　井	145.80	145.47
橈　骨	Pearson	152.10	150.76
	藤　井	149.29	148.70

表10　推定身長値（右大腿骨より，女性）　(cm)

	面縄第1貝塚・1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）		大　友弥生人（松下）		宮の本弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearson	145.20	1	144.81	8	147.91	5	148.08(左)	1	145.78(左)	16	149.97
藤　井	144.37	1	143.92		—	5	147.96(左)	1	145.22(左)	1	—

(4) 性別・年令

性別については，寛骨の大坐骨切痕の角度が大きく，また頭蓋の眉上弓の隆起も弱く，前頭骨も豊かに膨隆していることから，女性と考えられ，年令は，歯の咬耗は強いが，縫合が内板においても開離していることや恥骨結合面に平行隆線が認められることから，壮年と推定される。

総　　括

鹿児島県大島郡伊仙町（徳之島）にある面縄第1貝塚の第1洞から，1体の弥生時代人骨が出土した。徳之島から弥生時代人骨が出土したのはこれが初めてであり，また保存状態もきわ

めて良好であり，今後薩南諸島の形質人類学的研究の貴重な資料となるものと考えられるので，人類学的観察および計測を行なった。その結果は次のように要約できる。

1．性別・年令は，女性・壮年と推定される。

2．頭蓋最大長は165mm，最大幅は136mm，バジオン・ブレグマ高は130mmで，頭蓋長幅示数は82.42，長高示数は78.79，幅高示数は95.59となり，頭型としては，brachー，hypsiー，metriokran（短・高・中頭）に属していた。

3．眉上弓の隆起は弱く，鼻根部は比較的広くて，扁平である。

4．中顔幅は98mm，顔高は96mm，上顔高は61mmで，ウィルヒョー顔示数および上顔示数はそれぞれ97.96，62.24で，顔面頭蓋には強い低・広顔の傾向が認められる。

5．眼窩については，右側は低眼窩に，左側は中眼窩に属しており，また鼻示数は著しく大きく，過広鼻に属している。

6．風習的抜歯の痕跡は認められない。

7．上腕骨は短かく，骨体はやや太いが，三角筋粗面の発達は悪く，扁平性は弱い。

8．大腿骨も長さは短かく，骨体は細く，粗線の発達も著しく悪いもので，ややきゃしゃである。

9．脛骨も短かく，骨体も細く，ヒラメ筋線の発達は著しく悪く，脛骨もややきゃしゃで，扁平性も認められない。

10．右大腿骨最大長からの推定身長値は145.20cm（Pearson）となり，低身長である。

11．以上の様に，本例は短頭で，低・広顔であり，四肢骨は一様に短かく，比較的きゃしゃなものであった。これを周辺地域の弥生人と比較してみると，頭型，顔面の特徴，大腿骨および脛骨については奄美大島の宇宿弥生人に最も近似しているが，上腕骨は大友弥生人に最も近い。すなわち，四肢骨は全体的にきゃしゃではあるが，その程度は宇宿弥生人ほどではない。

南九州の弥生人については，金関（1966）によって広田弥生人の形質の一部が明らかにされている。金関によれば，広田弥生人の男性は短頭であるといい，松下によれば奄美大島の宇宿弥生人女性（1例）も過短頭である。また佐野（1978）によれば，沖縄の木綿原弥生人も男女とも強い短頭型に属しているという。本例も短頭型を呈しており，この短頭性は南西諸島の弥生人の共通した特徴なのかもしれない。しかし顔面の形態や四肢骨の性状についてはまだ不明な点が多く残されている。このような課題を解明するために，本地域での古人骨の収集と研究を今後とも進めていきたい。

＜擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた伊仙町教育委員会，鹿児島県教育庁文化課，ならびに人骨研究についてご指導いただいた内藤芳篤教授へ感謝致します。＞

表11　脳頭蓋計測値　(mm)

1.	頭蓋最大長	165
8.	頭蓋最大幅	136
17.	バジオン・ブレグマ高	130
8／1	頭蓋長幅示数	82.42
17／1	頭蓋長高示数	78.79
17／8	頭蓋幅高示数	95.59
9.	最小前頭幅	90
10.	最大前頭幅	114
5.	頭蓋底長	95
11.	両耳幅	116
12.	最大後頭幅	107
13.	乳突幅	97
7.	大後頭孔長	32
16.	大後頭孔幅	28
16／7	大後頭孔示数	87.50
23.	頭蓋水平周	486
24.	横弧長	304
25.	正中矢状弧長	352
	Vertex Rad	119
	Nasion Rad	86
	Subsp. Rad	93
	Prosth. Rad	98

表12　顔面頭蓋計測値　(mm, 度)

40.	顔長	100
41.	側顔長	69
42.	下顔長	109
43.	上顔幅	101
45.	頬骨弓幅	—
46.	中顔幅	98
47.	顔高	96
48.	上顔高	61
47／45	顔示数(K)	—
48／45	上顔示数(K)	—
47／46	顔示数(V)	97.96
48／46	上顔示数(V)	62.24
50.	前眼窩間幅	18
44.	両眼窩幅	97
50／44	眼窩間示数	18.56
51.	眼窩幅 (右)	42
	(左)	41
52.	眼窩高 (右)	30
	(左)	33
52／51	眼窩示数 (右)	71.43
	(左)	80.49
54.	鼻幅	29
55.	鼻高	47
54／55	鼻示数	61.70
57.	鼻骨最小幅	—
57(1)	鼻骨最大幅	—
60.	上顎歯槽長	—
61.	上顎歯槽幅	—
61／60	上顎歯槽示数	—
72.	全側面角	76
73.	鼻側面角	76
74.	歯槽側面角	77

表13　下顎骨計測値　(mm, 度)

65.	下顎関節突起幅	123
65(1).	下顎筋突起幅	98
66.	下顎角幅	93
68.	下顎長	63
69.	オトガイ高	22
69(1).	下顎体高(右)	27
	(左)	—
69(2).	下顎体高(右)	—
	(左)	—
69(3).	下顎体厚(右)	9
	(左)	8
70.	枝高(右)	58
	(左)	58
70(3).	下顎切痕高(右)	12
	(左)	13
71.	枝幅(右)	30
	(左)	28
71a.	最小枝幅(右)	29
	(左)	29
71(1).	下顎切痕幅(右)	35
	(左)	36
79.	下顎枝角(右)	125
	(左)	130
68／65	幅長示数	51.22
69(2)／69	下顎高示数(右)	—
	(左)	—
71／70	下顎枝示数(右)	51.72
	(左)	48.28
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数(右)	33.33
	(左)	—
	下顎幅示数	75.61
66／65	下顎切痕示数(右)	34.29
70(3)／71(1)	(左)	36.11

表14　鎖骨計測値　(mm)

		右	左
1.	鎖骨最大長	135	—
2a.	骨体彎曲高	30	28
2(1).	肩峰端彎曲高	27	—
4.	中央垂直径	8	8
5.	中央矢状径	11	12
6.	中央周	33	34
6／1	長厚示数	24.44	—
2a／1	彎曲示数	22.22	—
4／5	鎖骨断面示数	72.73	66.67

表15　上腕骨計測値　(mm)

		右	左
1.	上腕骨最大長	271	268
2.	上腕骨全長	266	254
5.	中央最大径	21	19
6.	中央最小径	16	16
7.	骨体最小周	57	53
7(a).	中　央　周	63	59
6／5	骨体断面示数	76.19	84.21
7／1	長厚示数	21.03	19.78

表16　橈骨計測値　(mm)

		右	左
1.	最　大　長	212	208
1b.	平　行　長	209	205
2.	機　能　長	197	197
3.	最　小　周	38	37
4.	骨体横径	16	15
4a.	骨体中央横径	15	14
5.	骨体矢状径	10	10
5a.	骨体中央矢状径	10	10
5(5)	骨体中央周	42	39
3／2	長厚示数	19.29	18.78
5／4	骨体断面示数	62.50	66.67
5a／4a	中央断面示数	66.67	71.43

表17　尺骨計測値　(mm)

		右	左
1.	最　大　長	—	—
2.	機　能　長	205	—
3.	最　小　周	—	—
11.	尺骨矢状径	12	11
12.	尺骨横径	16	15
S.	中央最小径	11	10
L.	中央最大径	17	16
C.	中　央　周	46	44
3／2	長厚示数	—	—
11／12	骨体断面示数	75.00	73.33
S／L	中央断面示数	64.71	62.50

表18　大腿骨計測値　(mm)

		右	左
1.	最　大　長	372	377
2.	自然位全長	370	374
6.	骨体中央矢状径	23	23
7.	骨体中央横径	23	22
8.	骨体中央周	73	73
9.	骨体上横径	28	27
10.	骨体上矢状径	21	21
8／2	長厚示数	19.73	19.52
6／7	骨体中央断面示数	100.00	104.55
10／9	上骨体断面示数	75.00	77.78

表19　脛骨計測値　(mm)

		右	左
1.	脛骨全長	312	312
1a.	脛骨最大長	319	320
1b.	脛　骨　長	307	308
2.	顆　距　長	294	295
8.	中央最大径	24	25
8a.	栄養孔位最大径	28	30
9.	中央横径	19	18
9a.	栄養孔位横径	20	20
10.	骨　体　周	68	70
10a.	栄養孔位周	78	79
10b.	最　小　周	65	65
9／8	中央断面示数	79.17	72.00
9a／8a	栄養孔位断面示数	71.43	66.67
10b／1	長厚示数	20.83	20.83

表20　腓骨計測値　(mm)

		右	左
1.	最　大　長	—	—
2.	中央最大径	13	12
3.	中央最小径	9	9
4.	中　央　周	37	35
4a.	最　小　周	33	32
3／2	中央断面示数	69.23	75.00
4a／1	長厚示数	—	—

参考文献

1．金関　丈夫，1955：弥生人種の問題。日本考古学講座，4：238－252。

2．金関　丈夫，1959：弥生時代の日本人。
日本の医学－第15回日本医学会総会学術集会記録－，1：167－174。

3．金関　丈夫，永井　昌文，佐野　一，1960：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究，7：1－36。

4．金関　丈夫，1966：弥生時代人。日本の考古学，3：460－471。

5．松下　孝幸，1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山（佐賀県文化財調査報告書第46集）：242－255。

6．松下　孝幸，1979：宇宿貝塚出土の人骨。宇宿貝塚（鹿児島県笠利町文化財調査報告書）：210－220。

7．松下　孝幸，内藤　芳篤，1981：「シンポジウム『骨からみた日本人の起源』Ⅳ。弥生時代人骨」。人類誌，199－200。

8．松下　孝幸，1981：佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書。第1集）。

9．松下　孝幸，1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：93－109，145－146。

10．松下　孝幸，1983：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。

11．Martin-Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429－597。

12．永井　昌文，1981：宇宿港遺跡出土の人骨について。宇宿港遺跡（研究室活動報告10）：33－32。

13．中橋　孝博，永井　昌文，1980：椎ノ木遺跡出土人骨について。馬毛島埋葬址：24－34。

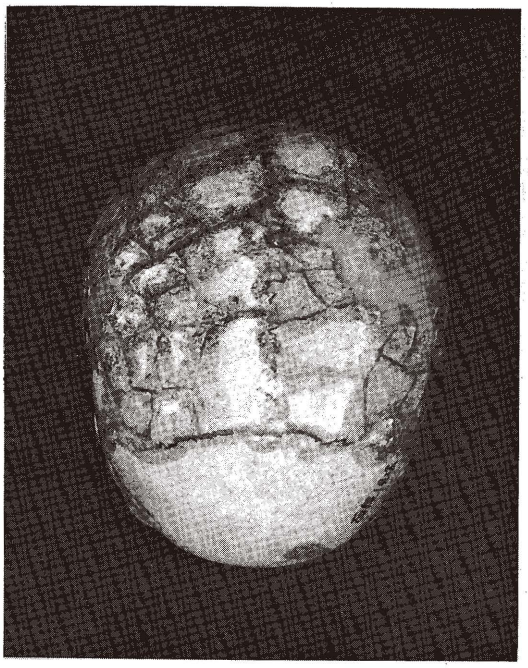
14．内藤　芳篤，1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類誌，79：236－248。

15．内藤　芳篤，松下　孝幸，1981：弥生時代人骨。季刊人類学，12：27－37。

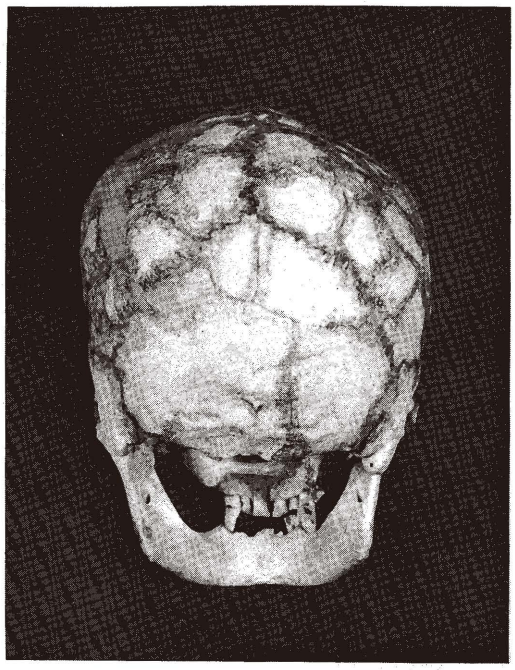
16．内藤　芳篤，1981：弥生時代人骨。人類学講座，5：57－99。

17．佐野　一，1978：木綿原遺跡出土の人骨について。
木綿原（読谷村文化財調査報告書第5集）：112－114。

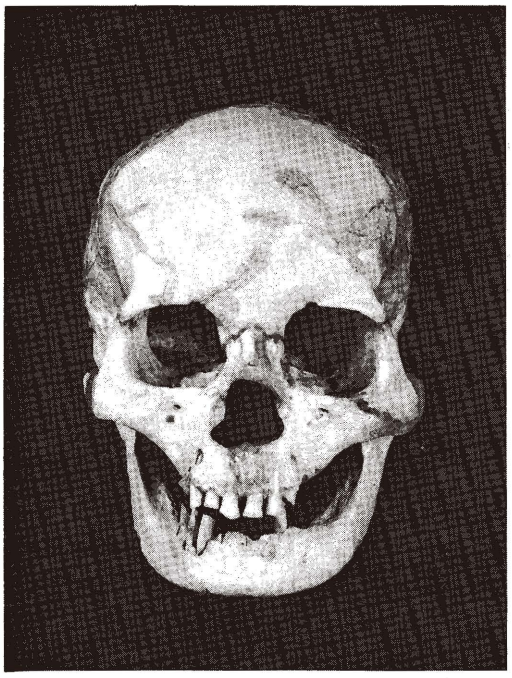
18．財津　博之，1956：山口県土井ケ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。
人類学研究，3：320－349。



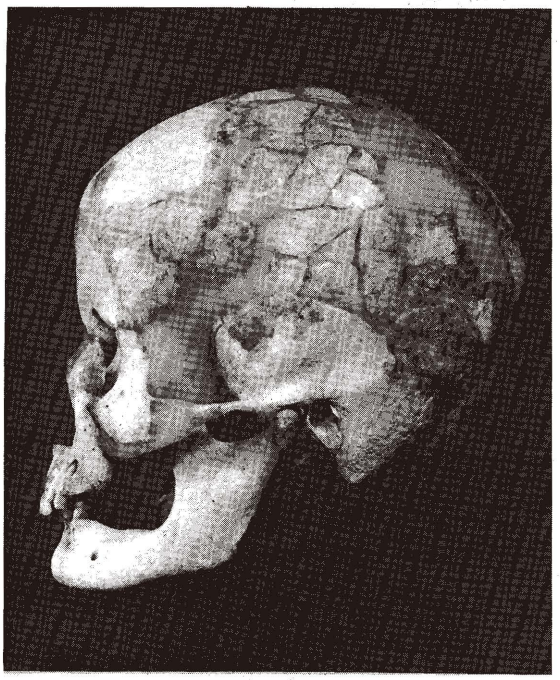
1



2

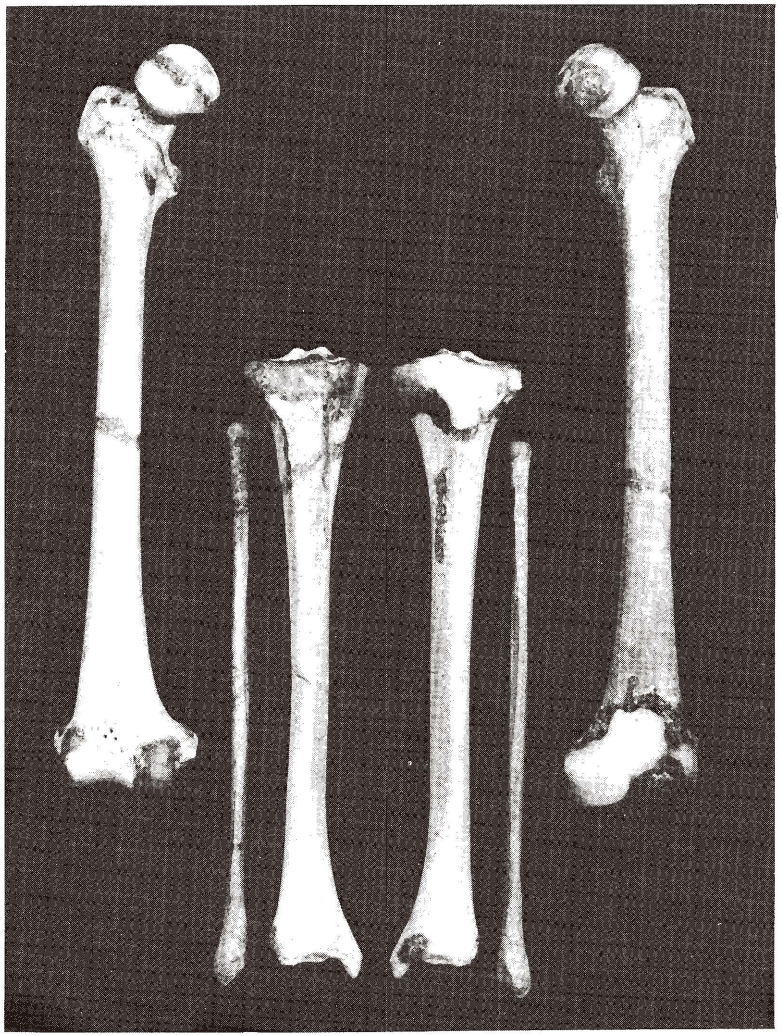


3



4

面縄第１貝塚１号人骨（女性・壮年）　　１＝上面，２＝後面，３＝前面，４＝側面

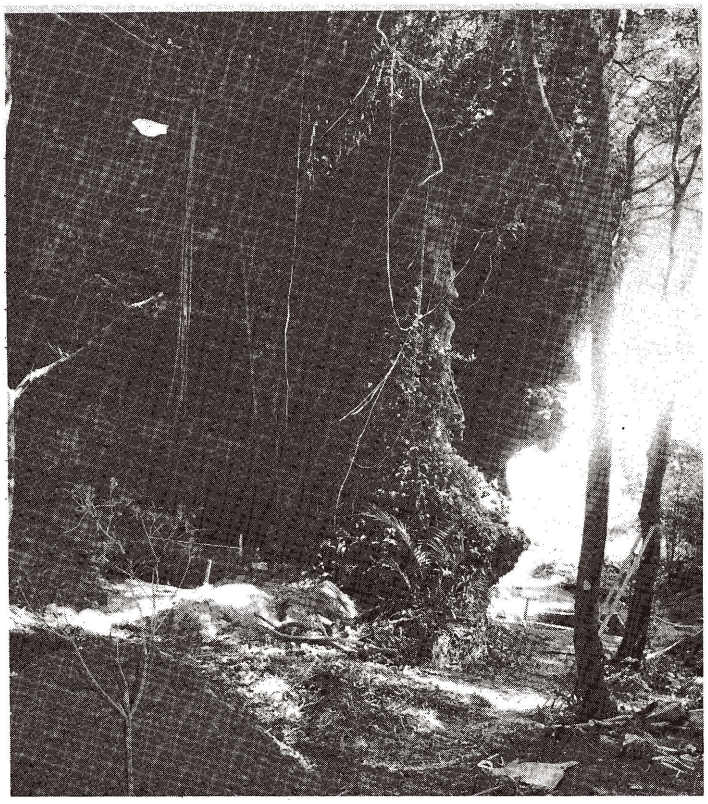


6
面縄第１貝塚１号人骨（女性・壮年）下肢骨

5
面縄第１貝塚１号人骨（女性・壮年）上肢骨

図　　版

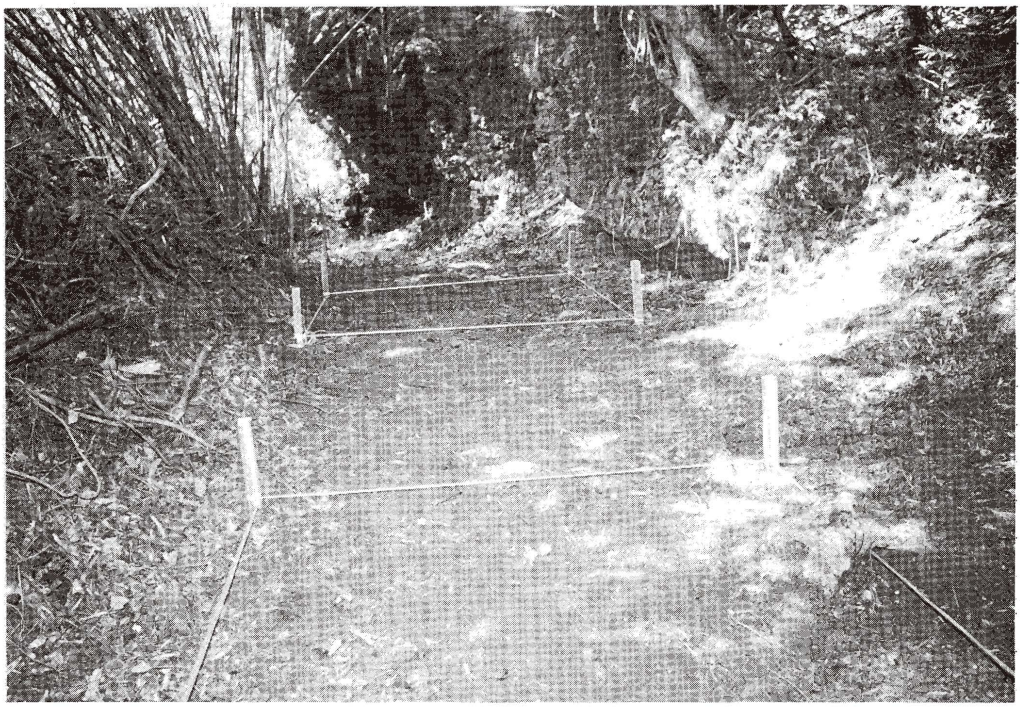
図版１



1．第一貝塚より東を望む

2．Ｂ区調査風景

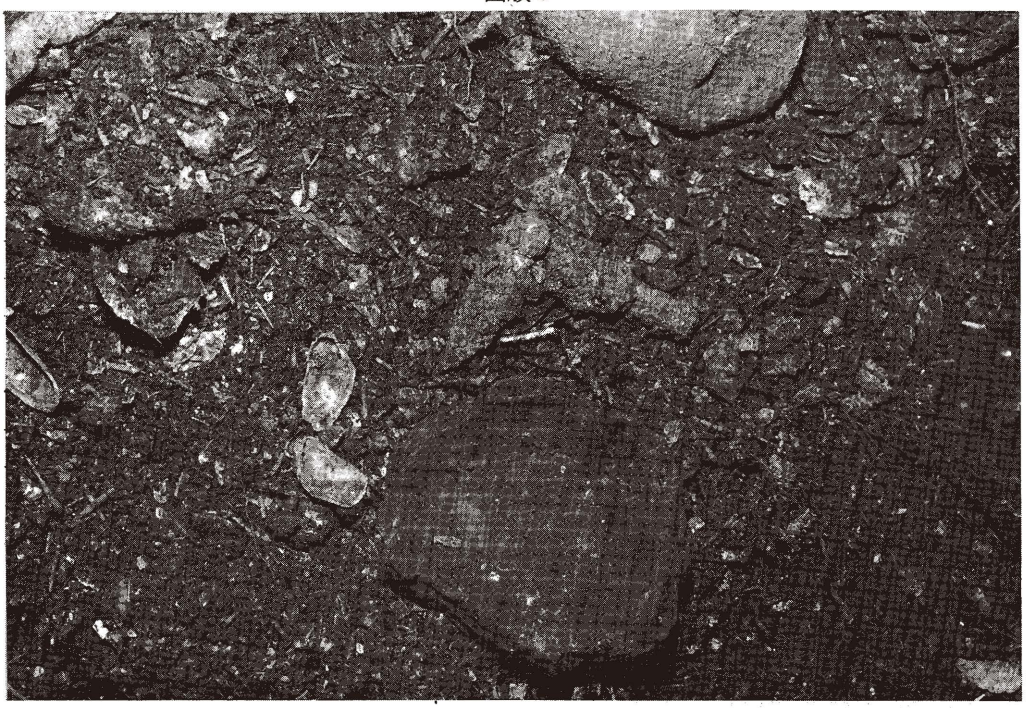
図版 2



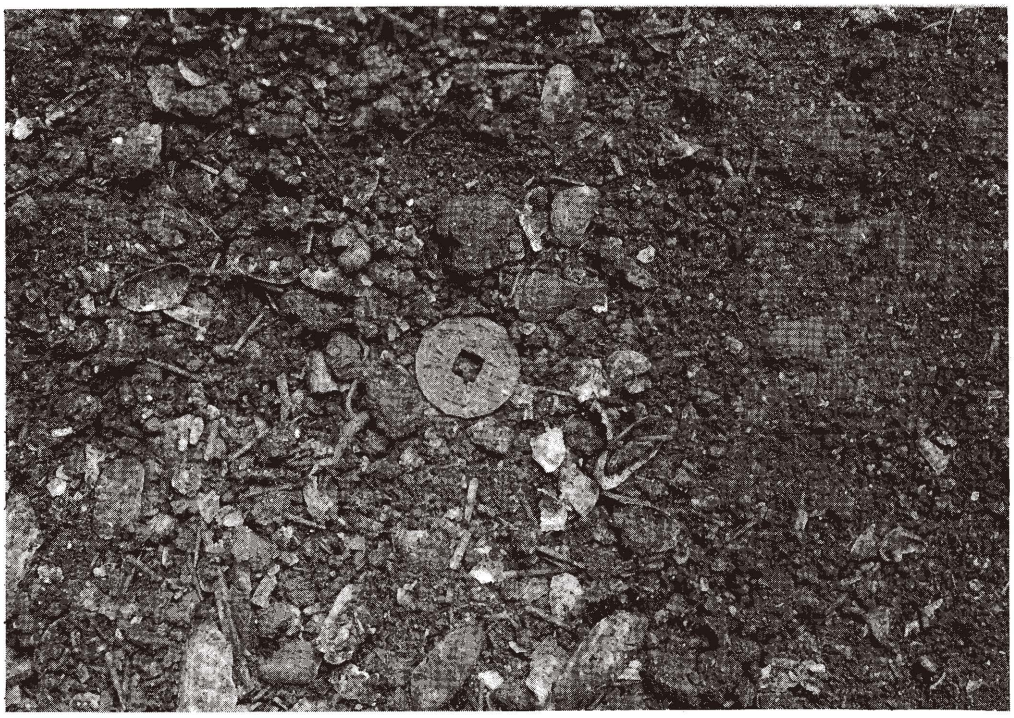
1．Aトレンチ西を望む(発掘前)

2．発掘風景

図版 3



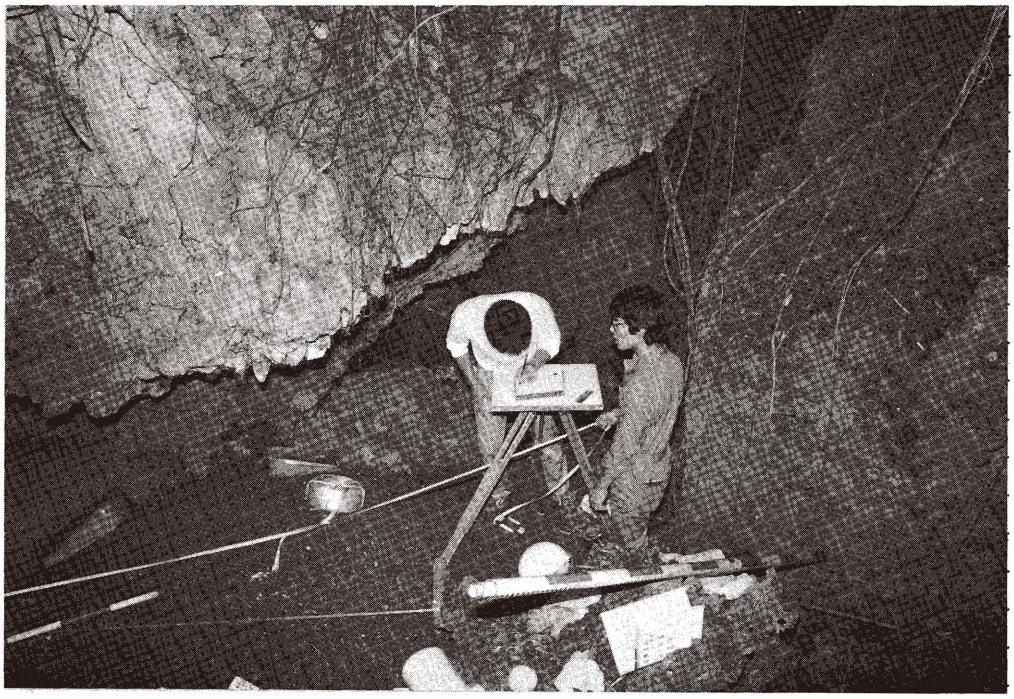
1．A－O区鉄製品出土状態



2．A－O区古銭(開元通宝)出土状態

図版 4

1．第 1 洞穴発掘風景



2．第 1 洞穴測量中

図版 5

1．第 1 洞穴兼久式土器出土状態

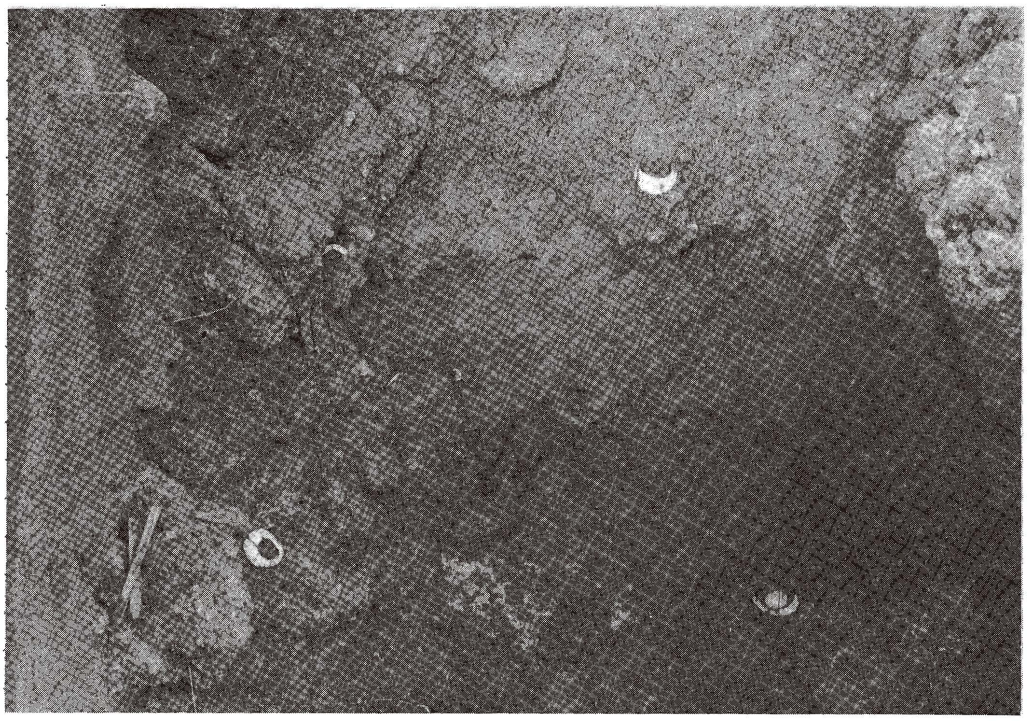
2．第 1 洞穴石斧出土状態

図版 6

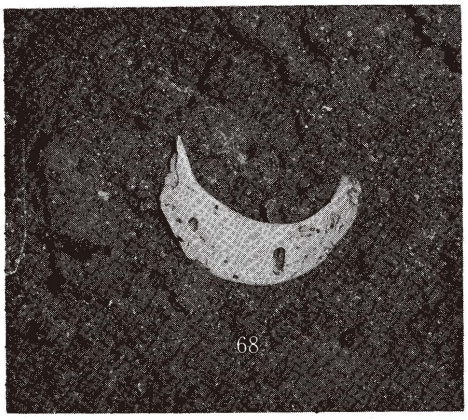
1．箱式石棺墓

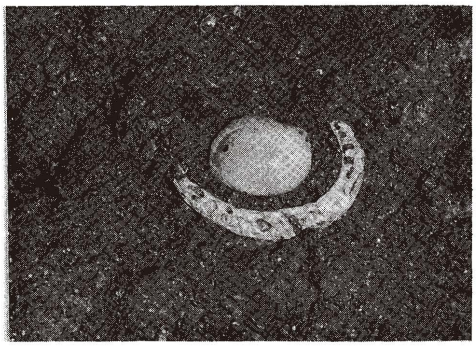
2．供献土器

図版 7



1．貝輪出土状態



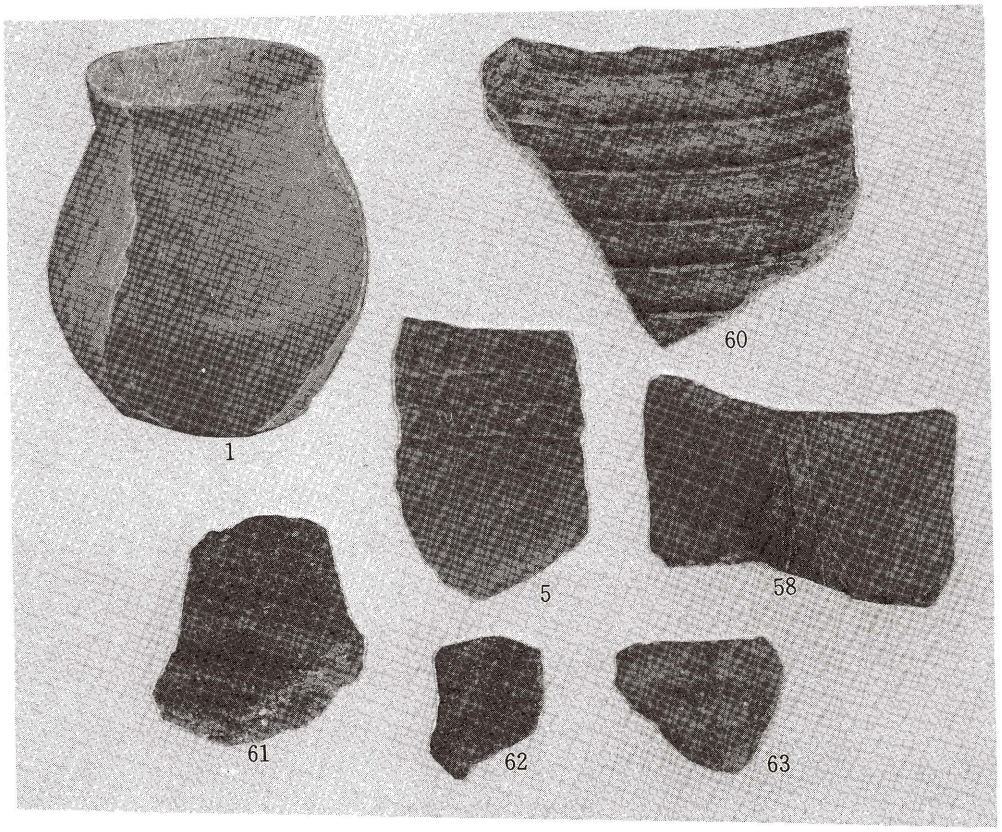


図版 8

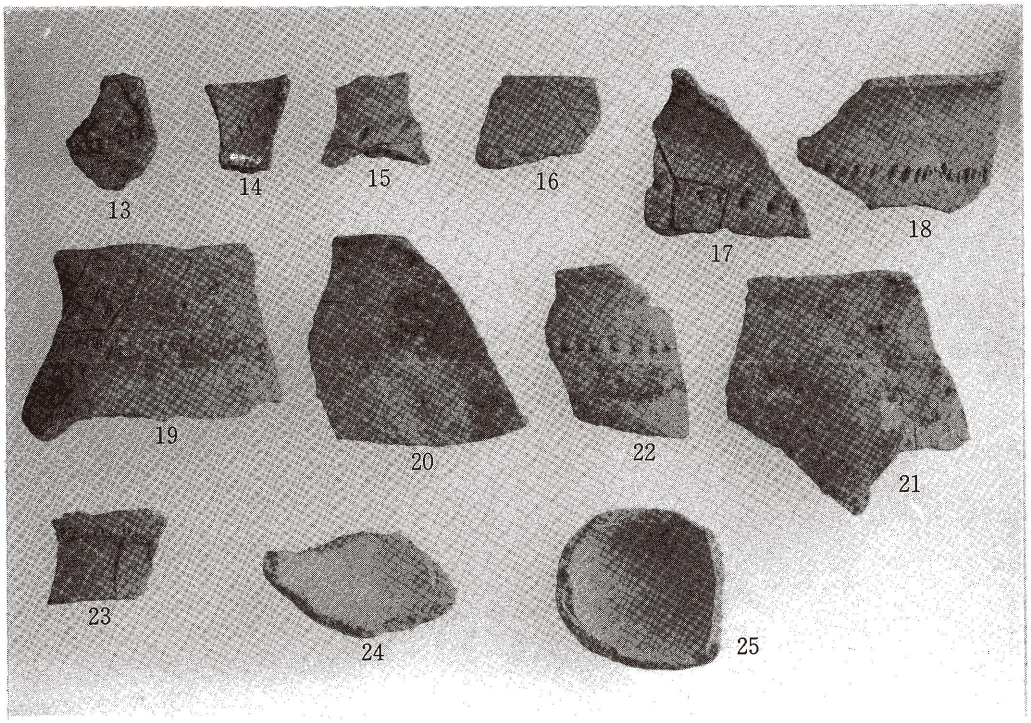
1．貝輪(64．65)出土状態

図版 9

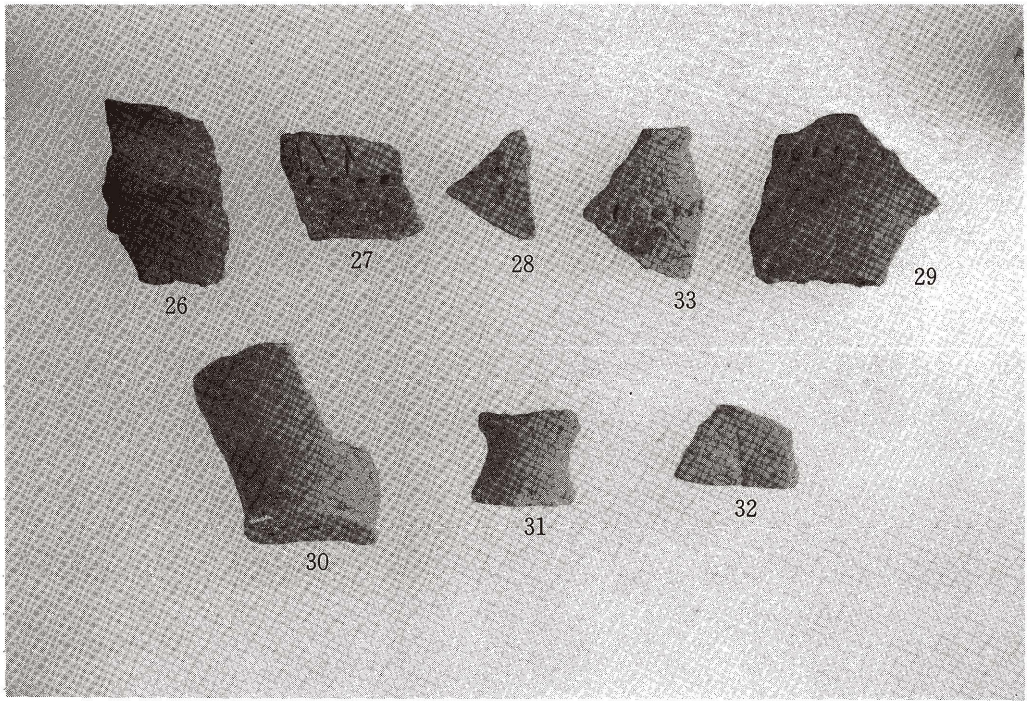
1．供献土器



図版10

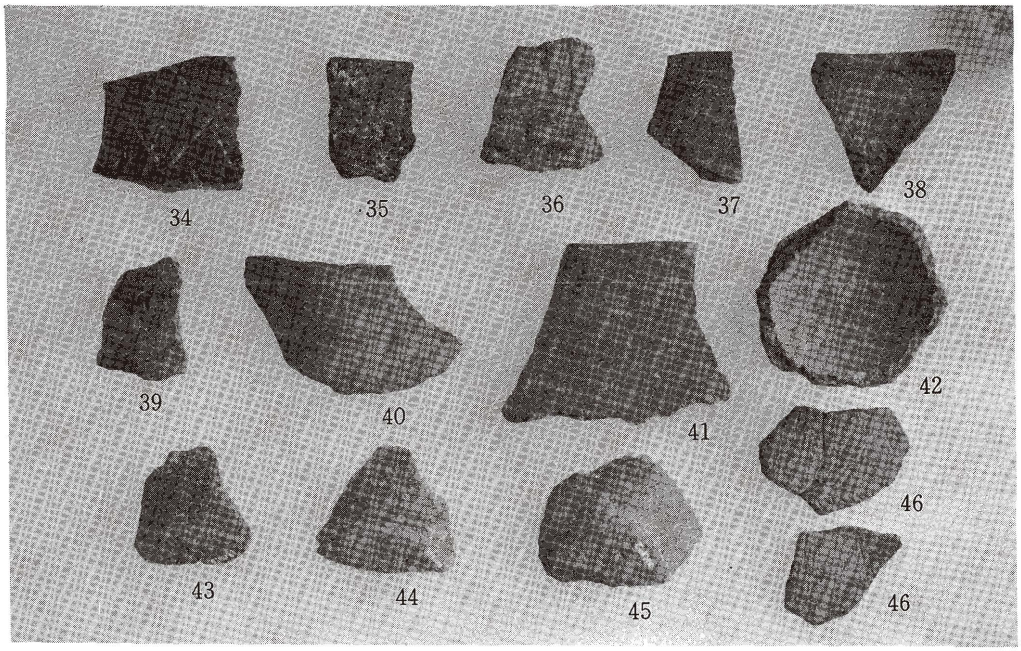


1．A－3区出土土器(兼久式)

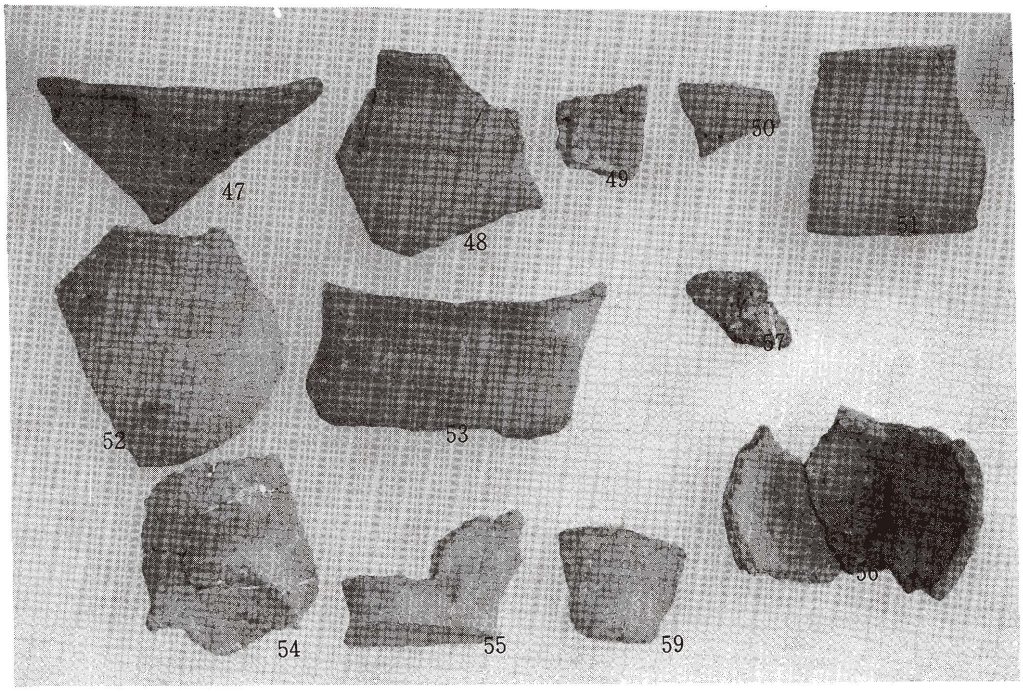


2．A－5区出土土器(兼久式)

図版11



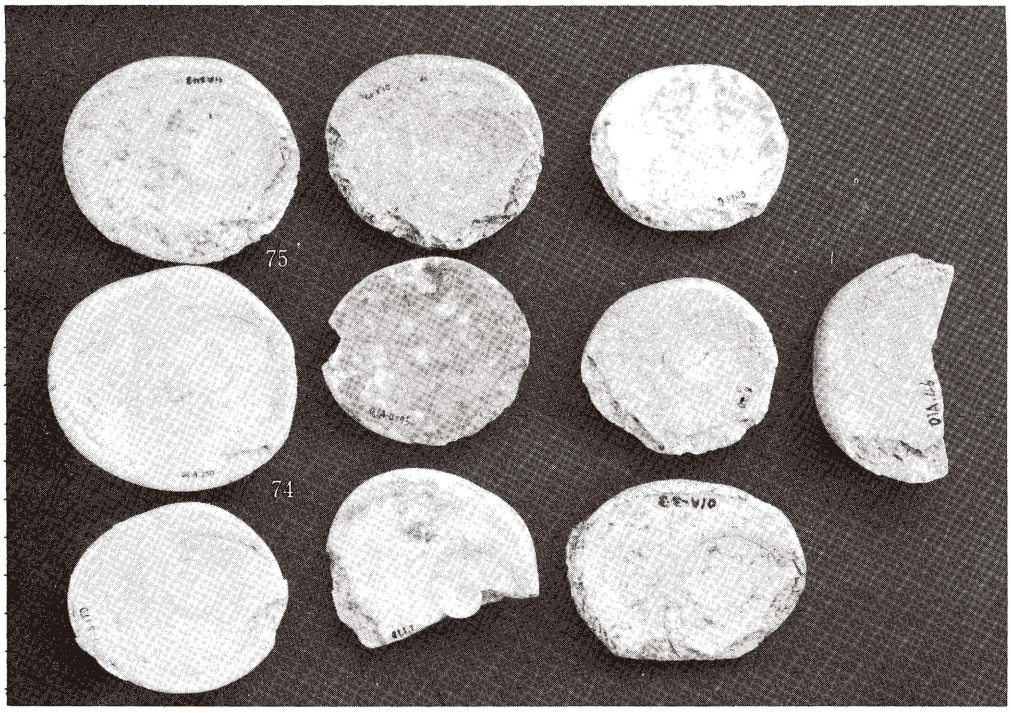
1．A－0区出土土器(兼久式・面縄前庭式)



2．A－1区出土土器(兼久式)

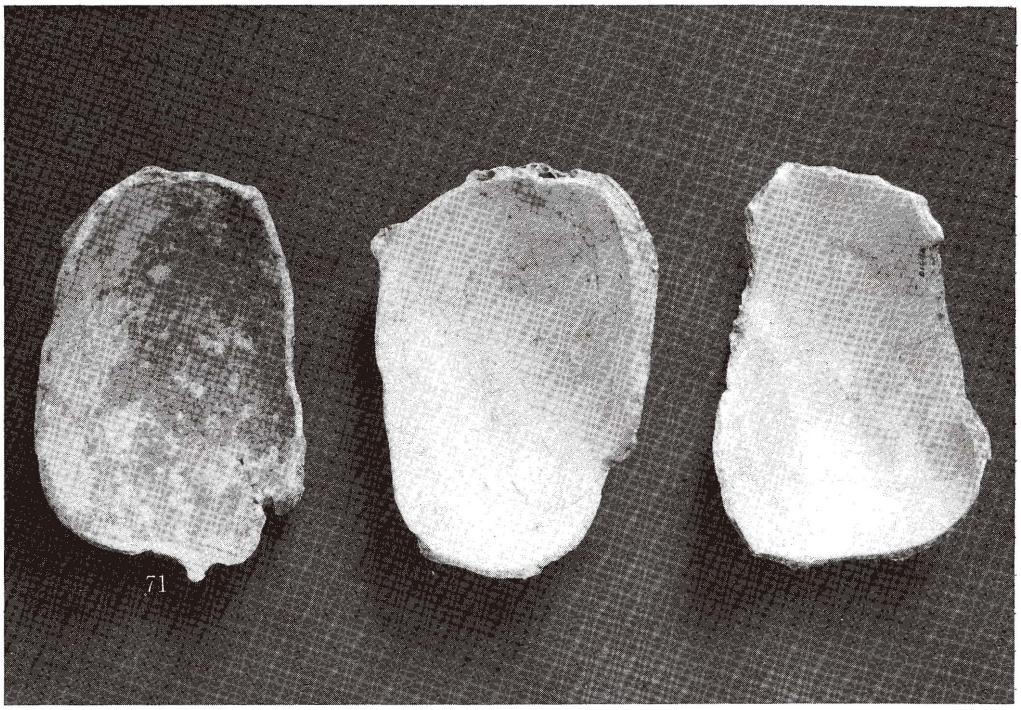
図版12

1．貝　輪



螺蓋製貝斧

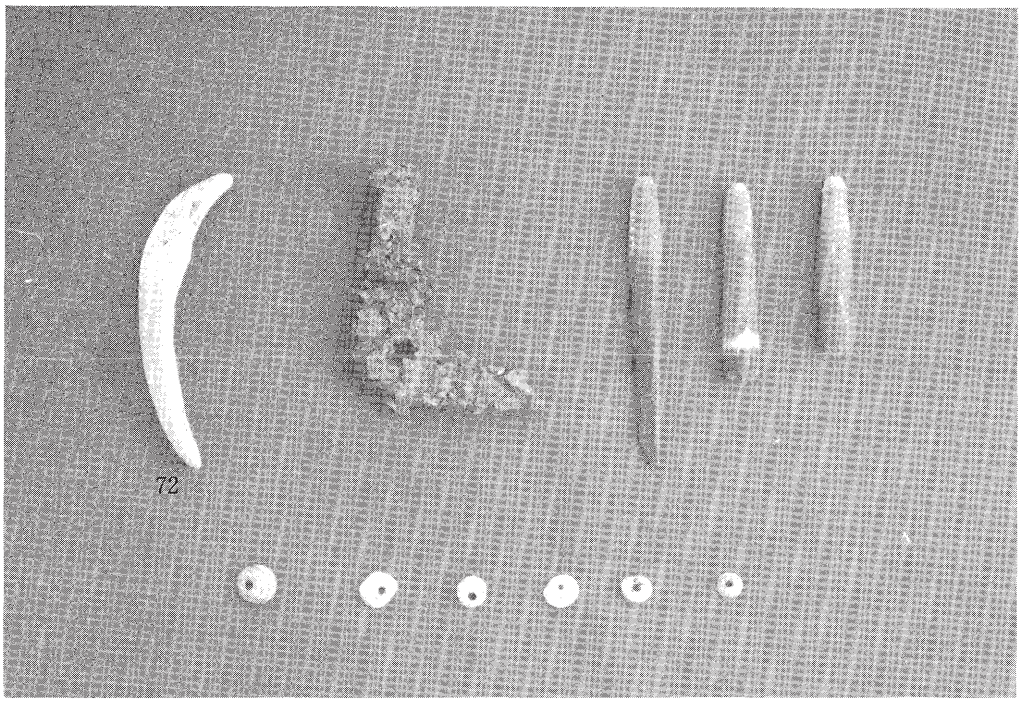
図版13



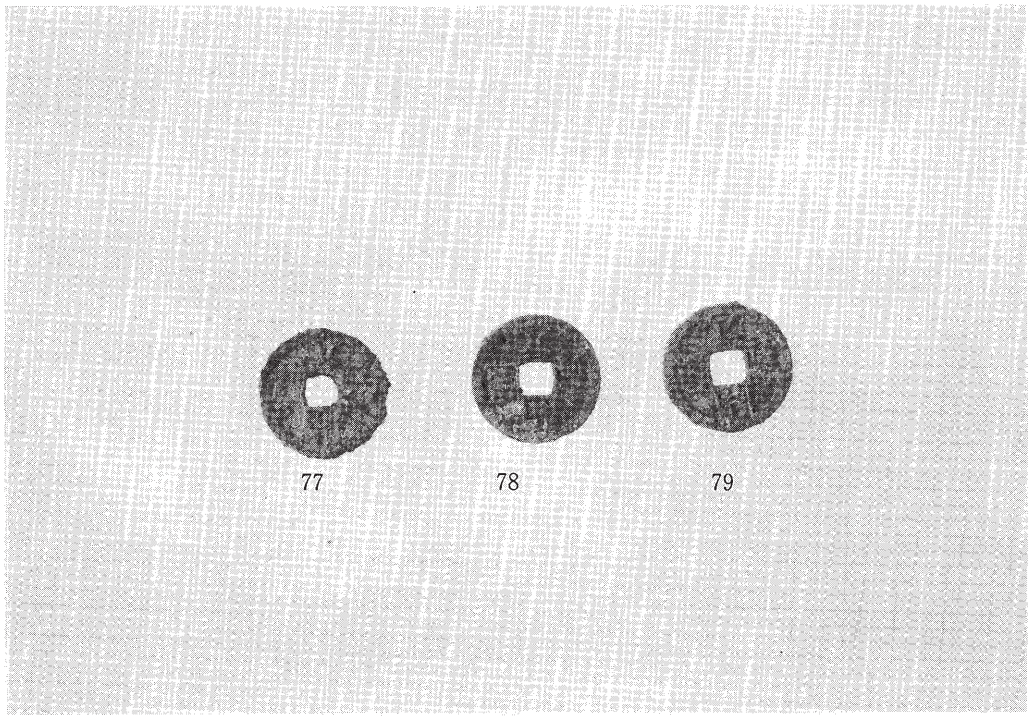
1．貝容器

2．貝匙

図版14

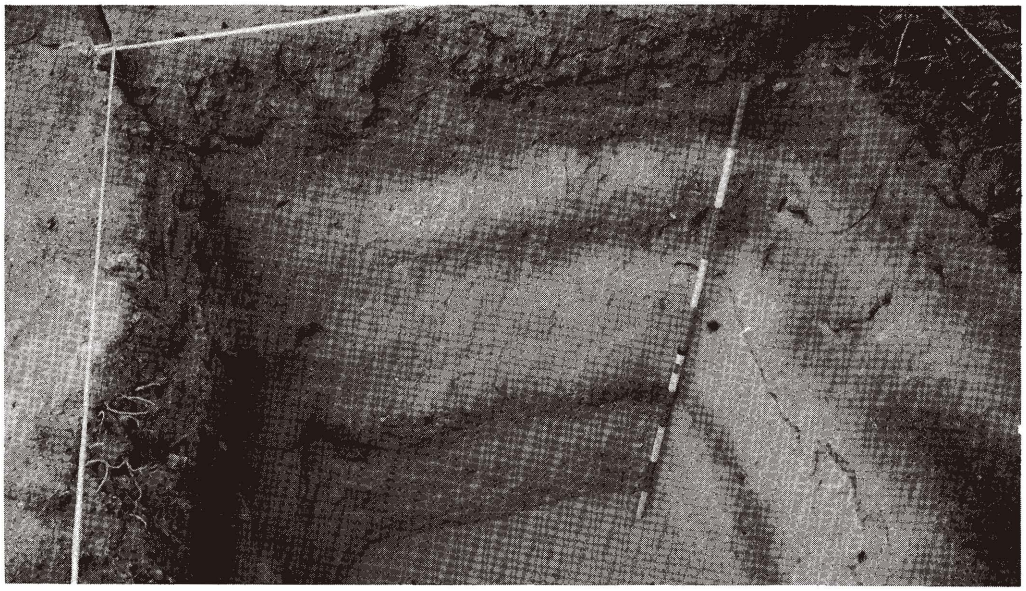


1．貝製品・鉄製品・パイプウニ・有孔貝



2．古銭「開元通宝」

図版15

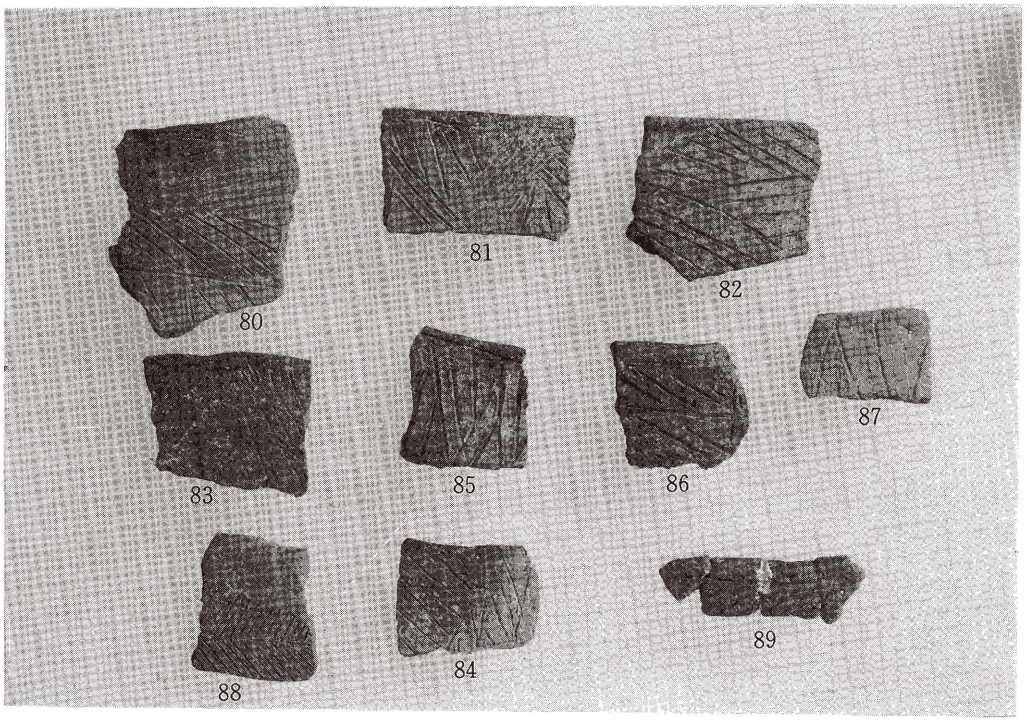


1．A－4区断面

2．住居址

図版16

1．住居址



2．第2貝塚出土土器(嘉徳Ⅱ式)

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告(1)

面縄第１．第２貝塚

発行日　1983年３月
発行者　大島郡伊仙町教育委員会
〒891－82　鹿児島県大島郡伊仙町伊仙
印刷所　有限会社　朝日印刷
住　所　鹿児島市上荒田町854－1
ＴＥＬ　0992－51－2191